



江戸名所図會

十四

朱  
二  
三  
八  
林  
冊

ル 4  
5105  
14





門ル4  
 號5105  
 卷1714



江戸名所圖會卷之九  
 玉衛之部目錄

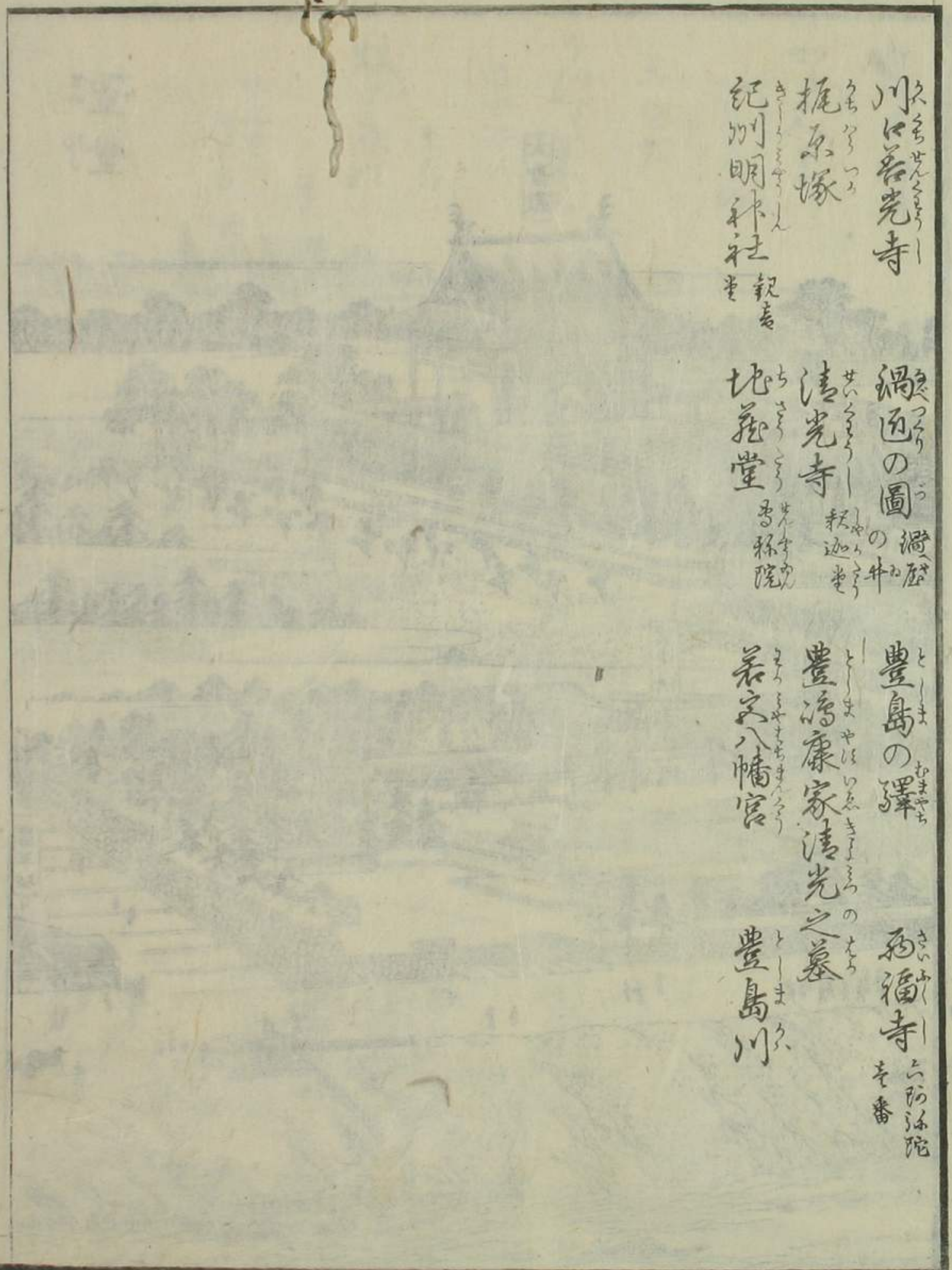
玉衛之部目錄

湯島聖堂 昌平坂  
 根生院 忍川  
 妻戀心神社  
 中島辨財天宮  
 湯島天満宮  
 圓満寺  
 東叡山寛永寺  
 谷中瑞林寺  
 螢澤 末林寺  
 七面大明神社  
 青雲寺  
 神田明神社  
 靈雲寺  
 湯島神社  
 池の端綿袋圓店  
 同祭禮の圖  
 麟祥院  
 不忍池  
 青蓮寺  
 養福寺  
 日暮里  
 感應寺  
 道灌山



昭41年12月20日  
 原安三郎氏贈





川口若光寺

梶原塚

紀州明神社

鍋匠の園

法光寺

地蔵堂

豊島の澤

豊島康家法光之墓

若文八幡宮

若福寺

豊島川

根津権現社

目赤不動堂

六月朝日富士詣の島

圓勝寺

白鬚明神社

飛鳥山

王子権現社

七月祭祀の島

金輪寺

金剛寺

王子権現社

根津権現舊地

駒込古祥寺

田畑子樂寺

深井西福寺

昌林寺

平塚城跡

音川

王子権現社

十八講の島

游不動堂

二法法住寺

駒込大観音

神明宮

平塚明神社

同合戦の島

同新酒亭の島

装束島衣裳櫃

石神井川

泉流遊

赤羽山八幡宮

妙林寺

丸山浄心寺

富士法洞宮

八幡宮

西谷妙覺寺

同末由の島

犬追物止魔の地

龍舟前舊跡

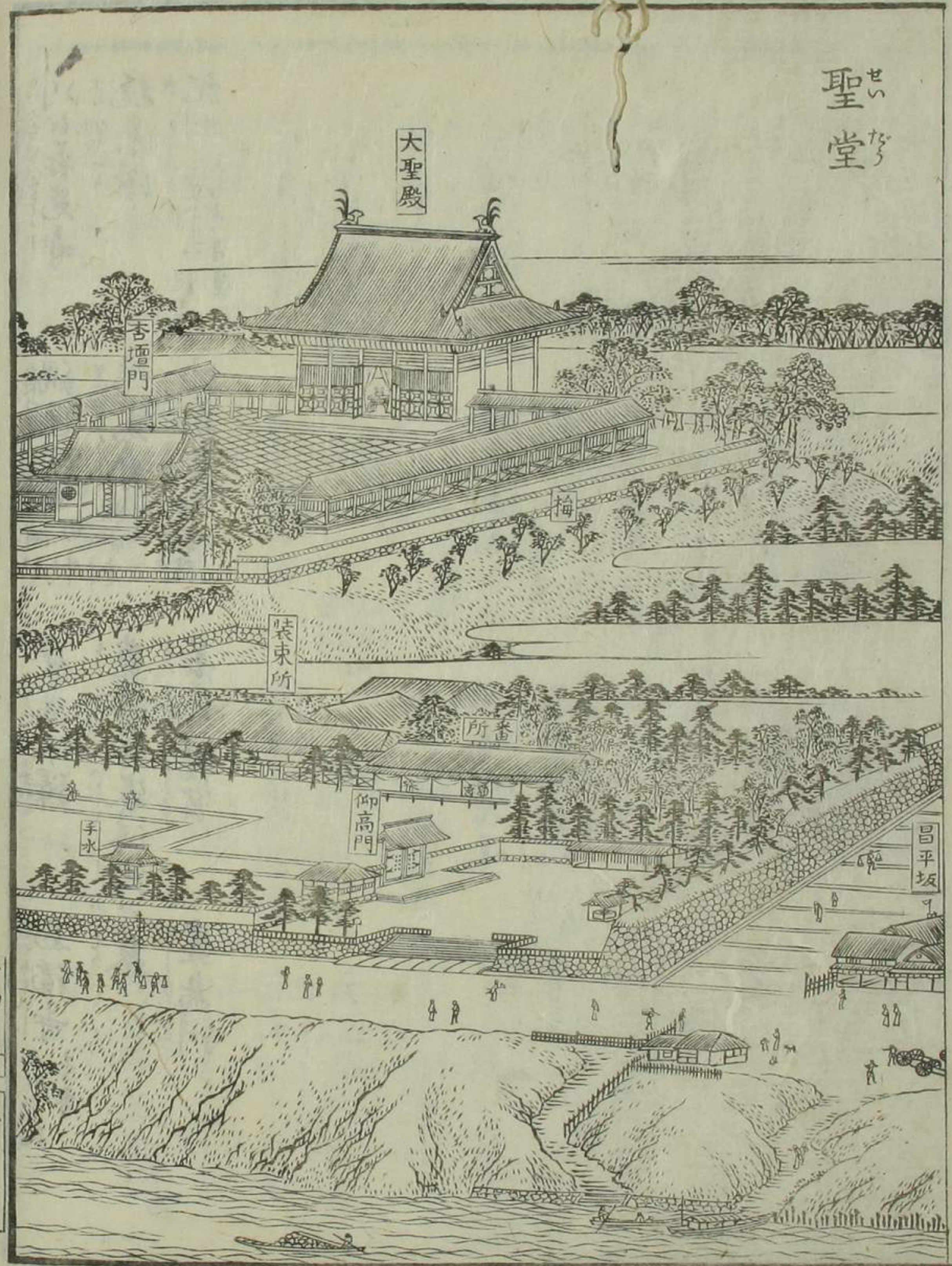
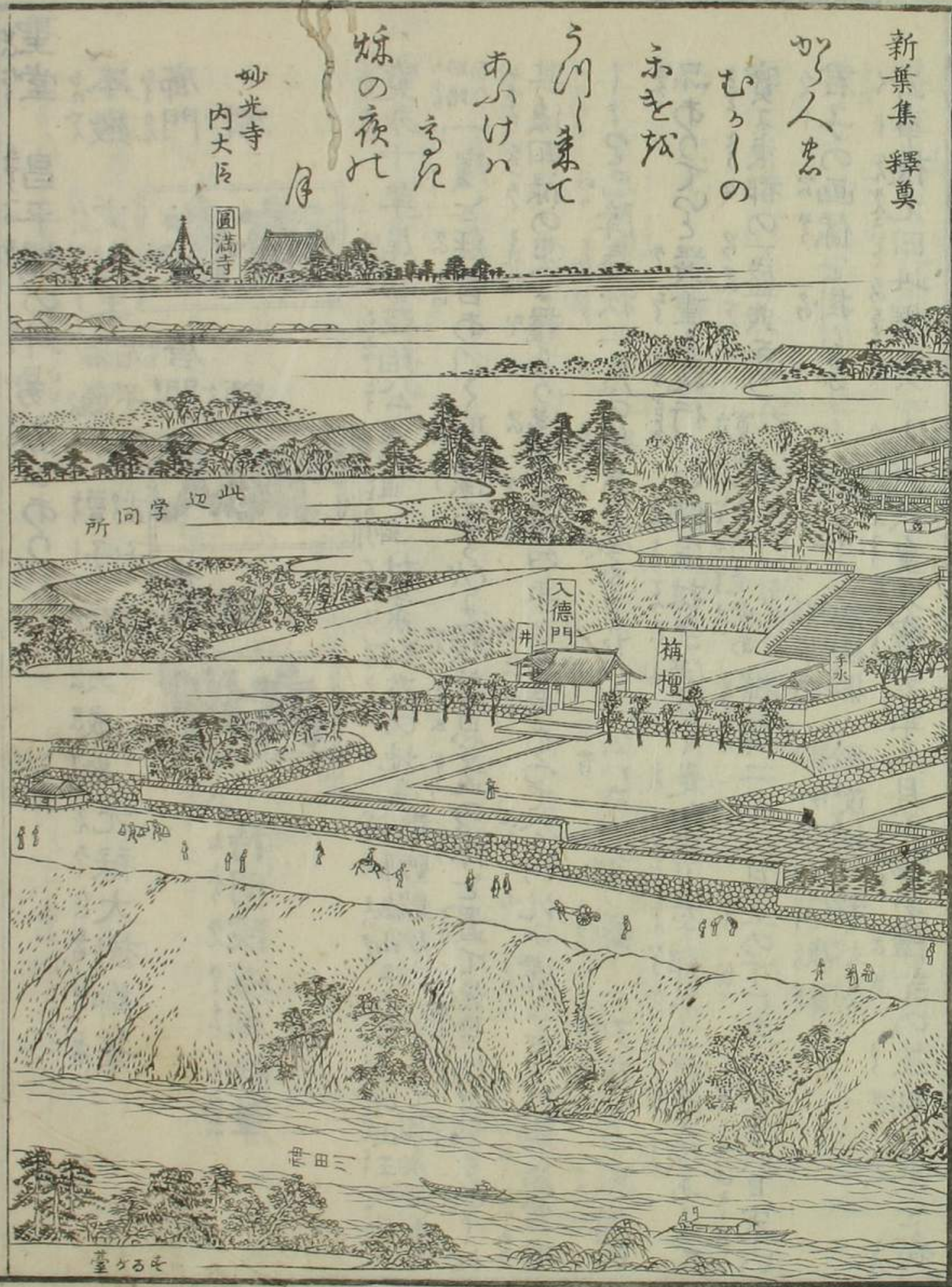
花法祭の島

除夜狐火の島

松樹女賊天

稻付静徳寺







聖堂 昌平橋の外湯島あり

本殿 文宣王 右顔子 曾子 孟子

廊門 額 唐門 額

檀香

人徳門

高仰

大成殿 元禄大樹御筆

持明院基輔御筆

寛永十年尾 劔亞相公

一慶と徑管あり

其後回祿の災は罹り遂に元禄四年

台命あつて今の地小遷させられ御造管有

品ありていと嚴重に執行り

實は東都の一盛典あり

君子の画像を掛らふ

公事根元曰此釋奠ハ文武天皇大寶元年二月より始り禮記の王制小菜を釋

林家別荘の地

昔聖堂あり

公のさうあり

是を司る奉邦第一學校ありて

釋奠二月八月上の下日に行り此日宋六

張横渠 程伊川 邵康節 朱文公

從祀

釋奠

幣は奠て先師を禮せとあり此故は釋奠といふあり後漢明帝孔氏宅に

幸して仲尼ありひは七十二弟子を祠とみえたり又先聖と孔子といひ先師とい

顔回といひありの周公を先聖と云孔子を先師といひ申さる唐太宗貞觀二年より

ありため先聖先師と孔子顔回を申さる又神護景雲二年孔宣父を改

て文宣王と申ふ弘仁格よ見えあり

年中行事哥合 釋奠

新葉集

神田大明神社 聖堂の北あり唯一あり江戸總鎮守と稱せ

祭神 大己貴命 平親王將門靈 二坐

社傳曰人皇四十五代聖武天皇の御宇天平二年に鎮座ありて其を免柴崎村に

其舊地神田橋 あり一頃中古荒廢し既し神燈絶あせとせし遊行上人第二世真

教坊東園遊化の砌に至り將門の靈を合て二座とし社の傍に一字に草庵に

むむび芝寄道場と號し

其後慶長八年當社を駿河臺より川

輪寺是なり

二位中將 妙善寺内大臣



神田明神社  
元々とておんの中

春景集  
 深夜の帰郷と  
 りんご林園に  
 社あり  
 高き  
 志ふ  
 とら  
 鳴はれて  
 都下とて  
 十の志  
 志



はまの松の

そは

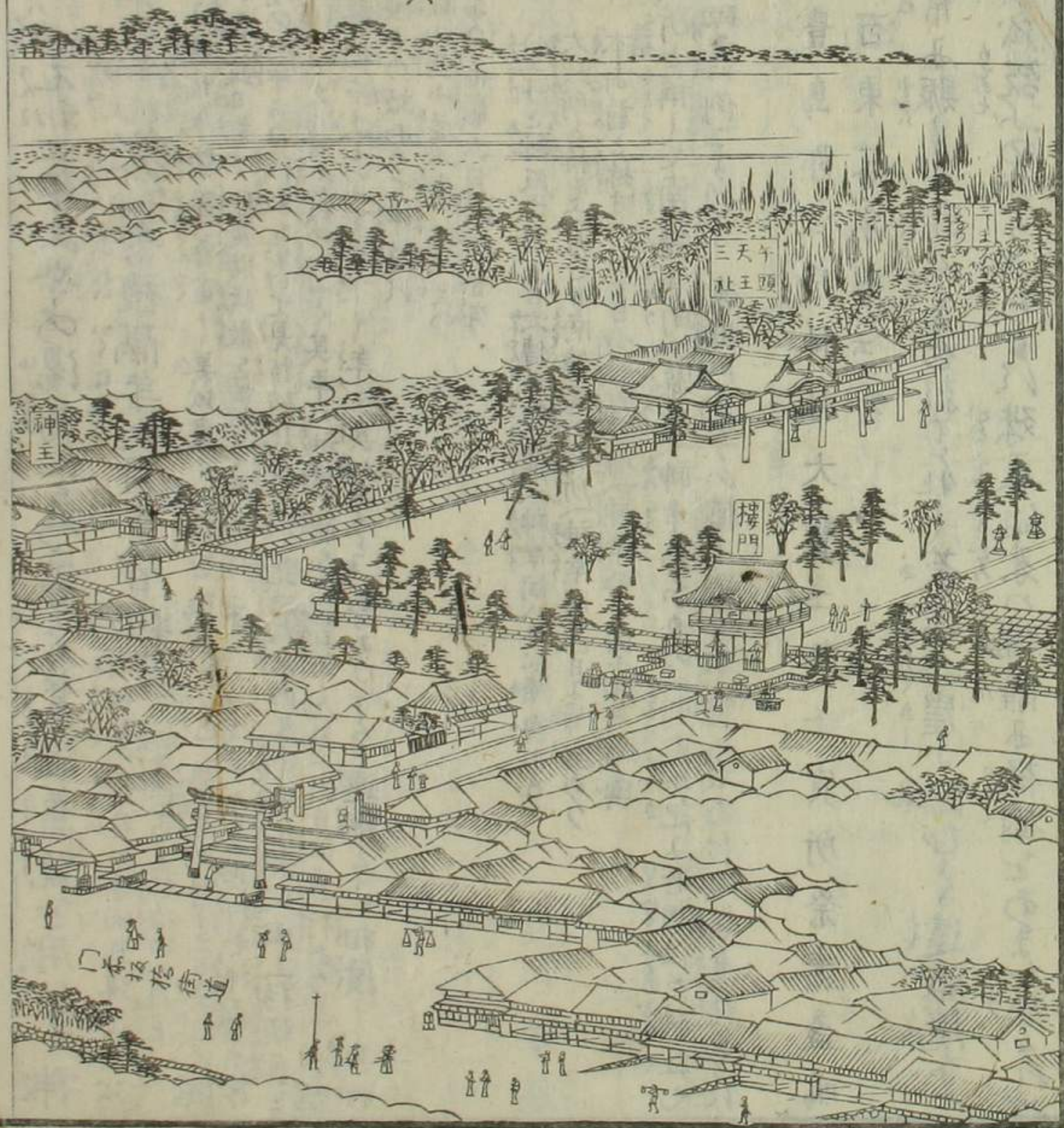
心家

夜半志

あり

う孫

志田  
 持資





元和二年又今の湯島にうさせらるる其儘舊號を用ひて神

祭禮隔年九月十五日 江戸神社の祭礼は永田馬場山王

神事能 隔年九月十五日 十六日小真行を神事能

神事能 隔年九月十五日 十六日小真行を神事能

神事能 隔年九月十五日 十六日小真行を神事能

神事能 隔年九月十五日 十六日小真行を神事能

神事能 隔年九月十五日 十六日小真行を神事能

神事能 隔年九月十五日 十六日小真行を神事能

神事能 隔年九月十五日 十六日小真行を神事能

神事能 隔年九月十五日 十六日小真行を神事能

神事能 隔年九月十五日 十六日小真行を神事能

神事能 隔年九月十五日 十六日小真行を神事能

神事能 隔年九月十五日 十六日小真行を神事能

神事能 隔年九月十五日 十六日小真行を神事能

神事能 隔年九月十五日 十六日小真行を神事能

神事能 隔年九月十五日 十六日小真行を神事能

神事能 隔年九月十五日 十六日小真行を神事能

神事能 隔年九月十五日 十六日小真行を神事能

神事能 隔年九月十五日 十六日小真行を神事能

神事能 隔年九月十五日 十六日小真行を神事能

神事能 隔年九月十五日 十六日小真行を神事能

神事能 隔年九月十五日 十六日小真行を神事能

神事能 隔年九月十五日 十六日小真行を神事能

神事能 隔年九月十五日 十六日小真行を神事能

神事能 隔年九月十五日 十六日小真行を神事能

神事能 隔年九月十五日 十六日小真行を神事能

神事能 隔年九月十五日 十六日小真行を神事能

神事能 隔年九月十五日 十六日小真行を神事能

神事能 隔年九月十五日 十六日小真行を神事能

神事能 隔年九月十五日 十六日小真行を神事能

神事能 隔年九月十五日 十六日小真行を神事能

神事能 隔年九月十五日 十六日小真行を神事能

神事能 隔年九月十五日 十六日小真行を神事能

神事能 隔年九月十五日 十六日小真行を神事能

弥生の頃最美觀なり

萬昌山圓滿寺 湯島六丁目あり真言宗ありて閑山多本食義高上人

なり奉尊十一面觀世音如意法尼の淨化あり

み六親音を安置以當寺世に本食寺と稱す

寺傳曰閑山本食義高上人覺海と號以足利十三代將軍義輝公の孫

義辰の息あり 義運の子孫あり日向園は産糸幼より瑞相あり仍て出家し

肥後園佐土原の福禪寺に入り覺深師に隨從し本食と稱れり寛文八年衆

生化益のために東奥より下りてあまねく靈地を築き堂宇を建立せ仁和

寺宮道永法親王此事を聞し召れ感稱ありて傳燈大阿闍梨權大僧都法印

み任せし後其後西園に赴く頃も大に奇特を顯し延寶三年十月都小上り

堀河姉小跡多門寺に止宿あり頃微疾を患へ同四年正月廿一日自臨終の

期を知り時諸の菩薩來現ありて示して曰唯今の汝が臨終の期あり

らば早往生せんと思ふ猶大願成企普く衆生を化益せんと云仍同五年

祭神 五男三女 王子と稱し六月五日大傳馬町旅所(神幸同日に歸輿あり)

祭神 素盞鳴尊 大政所と稱し六月七日南傳馬町旅所(神幸同日に歸輿あり)

祭神 素盞鳴尊 本御前と稱し六月十日小船町旅所(神幸あり同日に歸輿あり)

祭神 素盞鳴尊 寺稻田姫 本御前と稱し六月十日小船町旅所(神幸あり同日に歸輿あり)

祭神 素盞鳴尊 社家の説小大政所と稱して南傳馬町の旅所(神幸あり同日に歸輿あり)

祭神 素盞鳴尊 社家の説小大政所と稱して南傳馬町の旅所(神幸あり同日に歸輿あり)

祭神 素盞鳴尊 社家の説小大政所と稱して南傳馬町の旅所(神幸あり同日に歸輿あり)

祭神 素盞鳴尊 社家の説小大政所と稱して南傳馬町の旅所(神幸あり同日に歸輿あり)

祭神 素盞鳴尊 社家の説小大政所と稱して南傳馬町の旅所(神幸あり同日に歸輿あり)

祭神 素盞鳴尊 社家の説小大政所と稱して南傳馬町の旅所(神幸あり同日に歸輿あり)

祭神 素盞鳴尊 社家の説小大政所と稱して南傳馬町の旅所(神幸あり同日に歸輿あり)

祭神 素盞鳴尊 社家の説小大政所と稱して南傳馬町の旅所(神幸あり同日に歸輿あり)

祭神 素盞鳴尊 社家の説小大政所と稱して南傳馬町の旅所(神幸あり同日に歸輿あり)

祭神 素盞鳴尊 社家の説小大政所と稱して南傳馬町の旅所(神幸あり同日に歸輿あり)

祭神 素盞鳴尊 社家の説小大政所と稱して南傳馬町の旅所(神幸あり同日に歸輿あり)

祭神 素盞鳴尊 社家の説小大政所と稱して南傳馬町の旅所(神幸あり同日に歸輿あり)

祭神 素盞鳴尊 社家の説小大政所と稱して南傳馬町の旅所(神幸あり同日に歸輿あり)

祭神 素盞鳴尊 社家の説小大政所と稱して南傳馬町の旅所(神幸あり同日に歸輿あり)

祭神 素盞鳴尊 社家の説小大政所と稱して南傳馬町の旅所(神幸あり同日に歸輿あり)

祭神 素盞鳴尊 社家の説小大政所と稱して南傳馬町の旅所(神幸あり同日に歸輿あり)

祭神 素盞鳴尊 社家の説小大政所と稱して南傳馬町の旅所(神幸あり同日に歸輿あり)

祭神 素盞鳴尊 社家の説小大政所と稱して南傳馬町の旅所(神幸あり同日に歸輿あり)

祭神 素盞鳴尊 社家の説小大政所と稱して南傳馬町の旅所(神幸あり同日に歸輿あり)

祭神 素盞鳴尊 社家の説小大政所と稱して南傳馬町の旅所(神幸あり同日に歸輿あり)

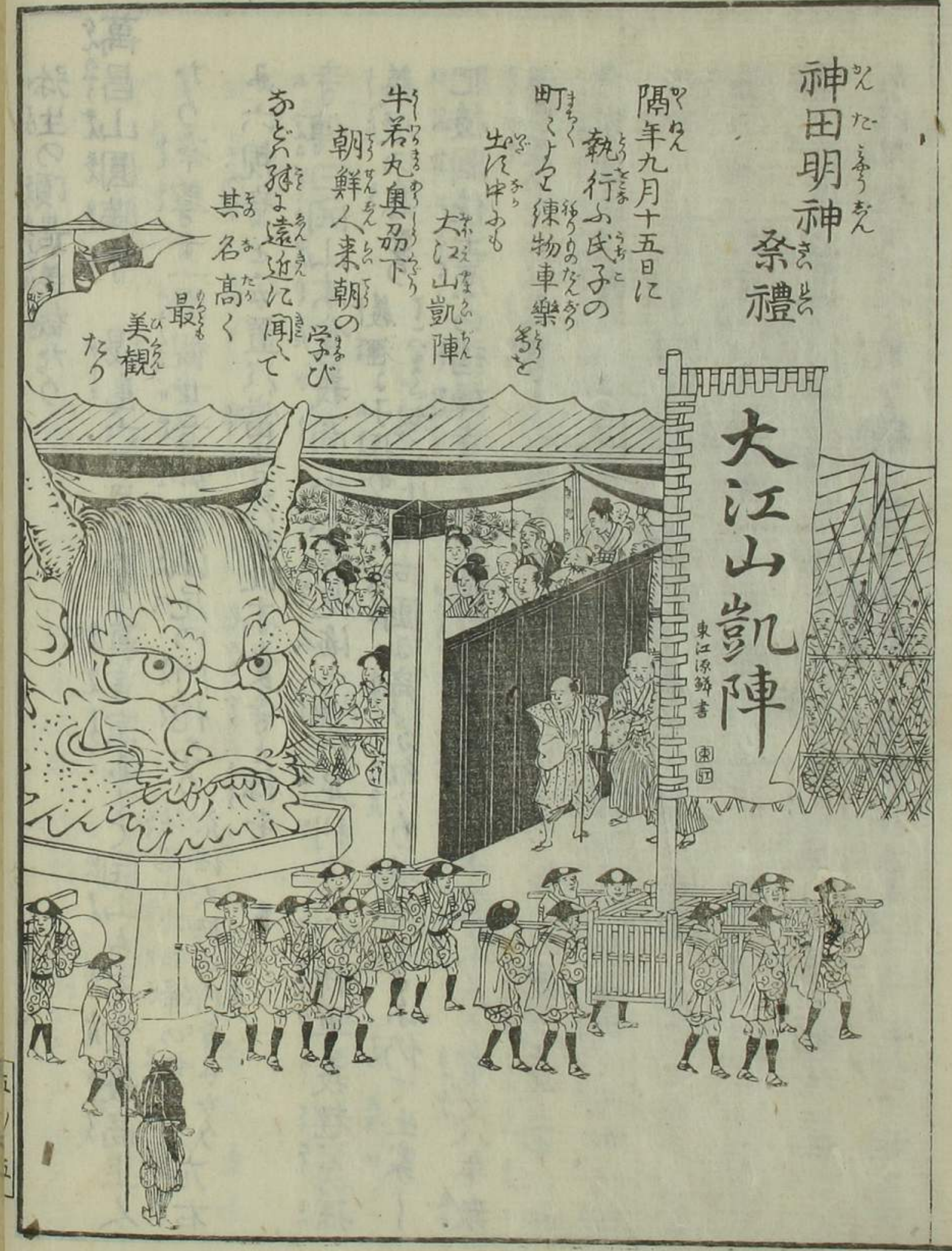
祭神 素盞鳴尊 社家の説小大政所と稱して南傳馬町の旅所(神幸あり同日に歸輿あり)

祭神 素盞鳴尊 社家の説小大政所と稱して南傳馬町の旅所(神幸あり同日に歸輿あり)

祭神 素盞鳴尊 社家の説小大政所と稱して南傳馬町の旅所(神幸あり同日に歸輿あり)

祭神 素盞鳴尊 社家の説小大政所と稱して南傳馬町の旅所(神幸あり同日に歸輿あり)





神田明神

祭禮

大江山凱陣

東江源録書

隔年九月十五日

執行の氏子の

町を練物車樂

出陣

大江山凱陣

牛若丸奥刃下

朝鮮人來朝の

あど孫は遠近に傳へ

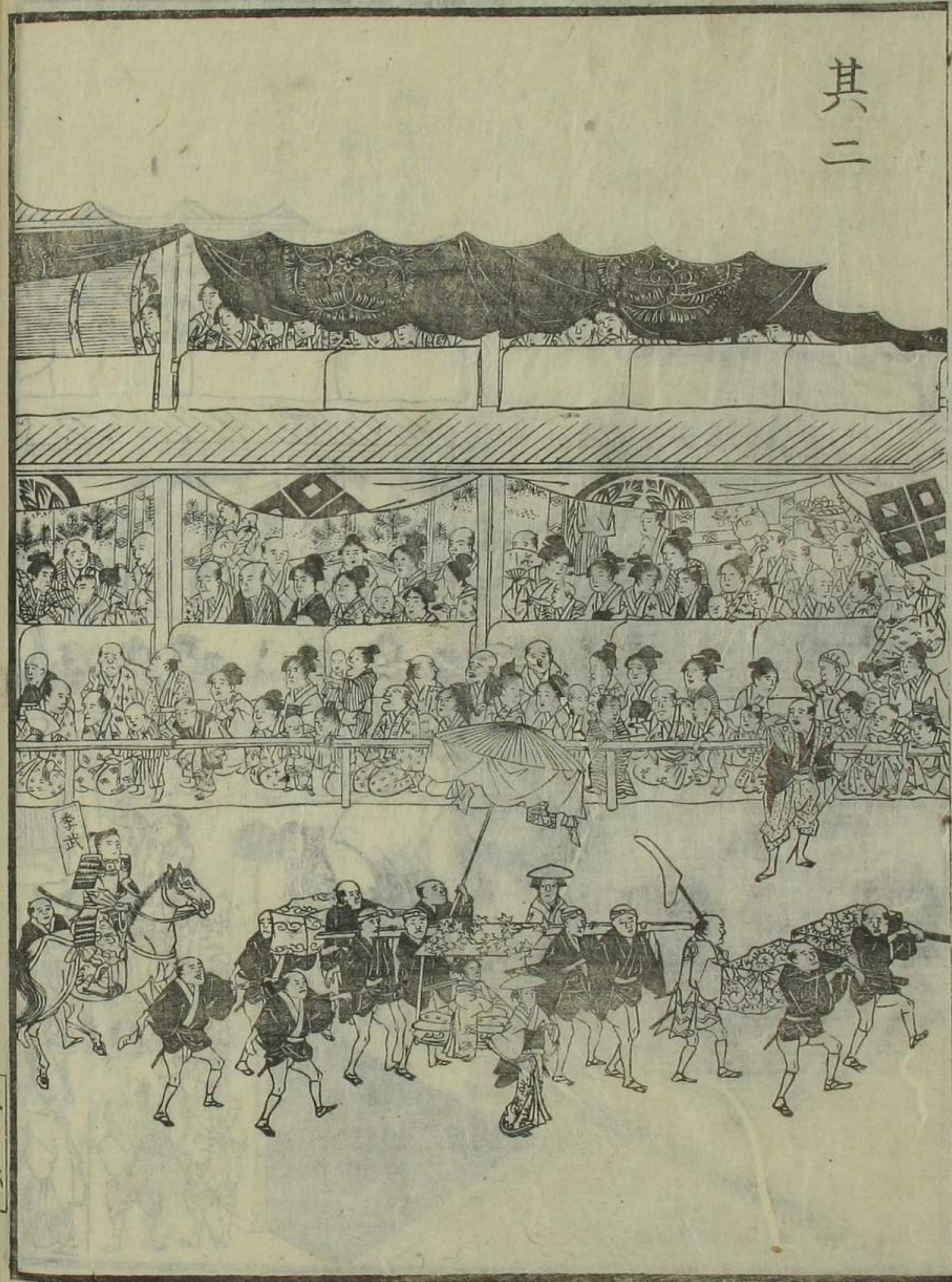
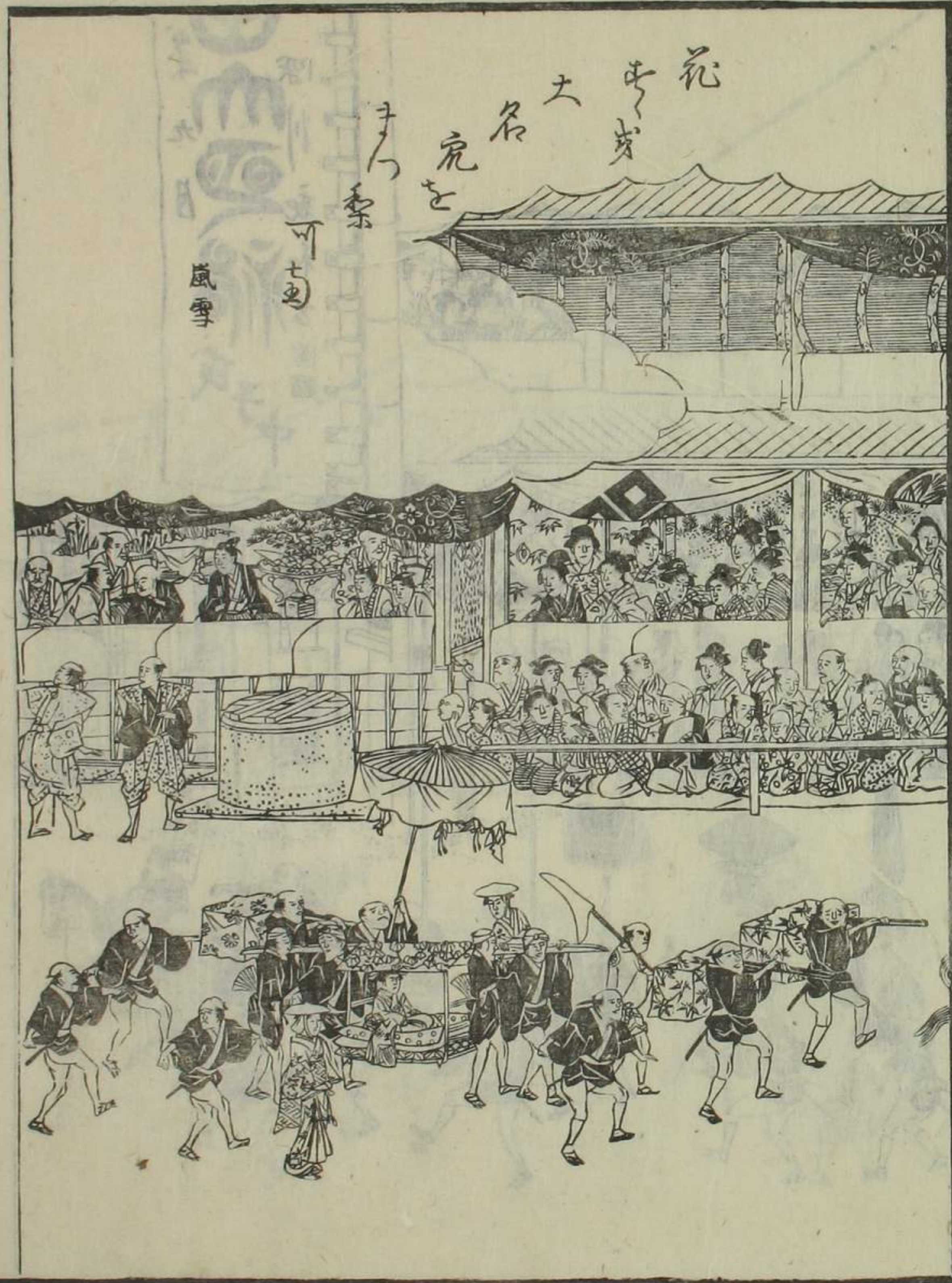
其名高く

最

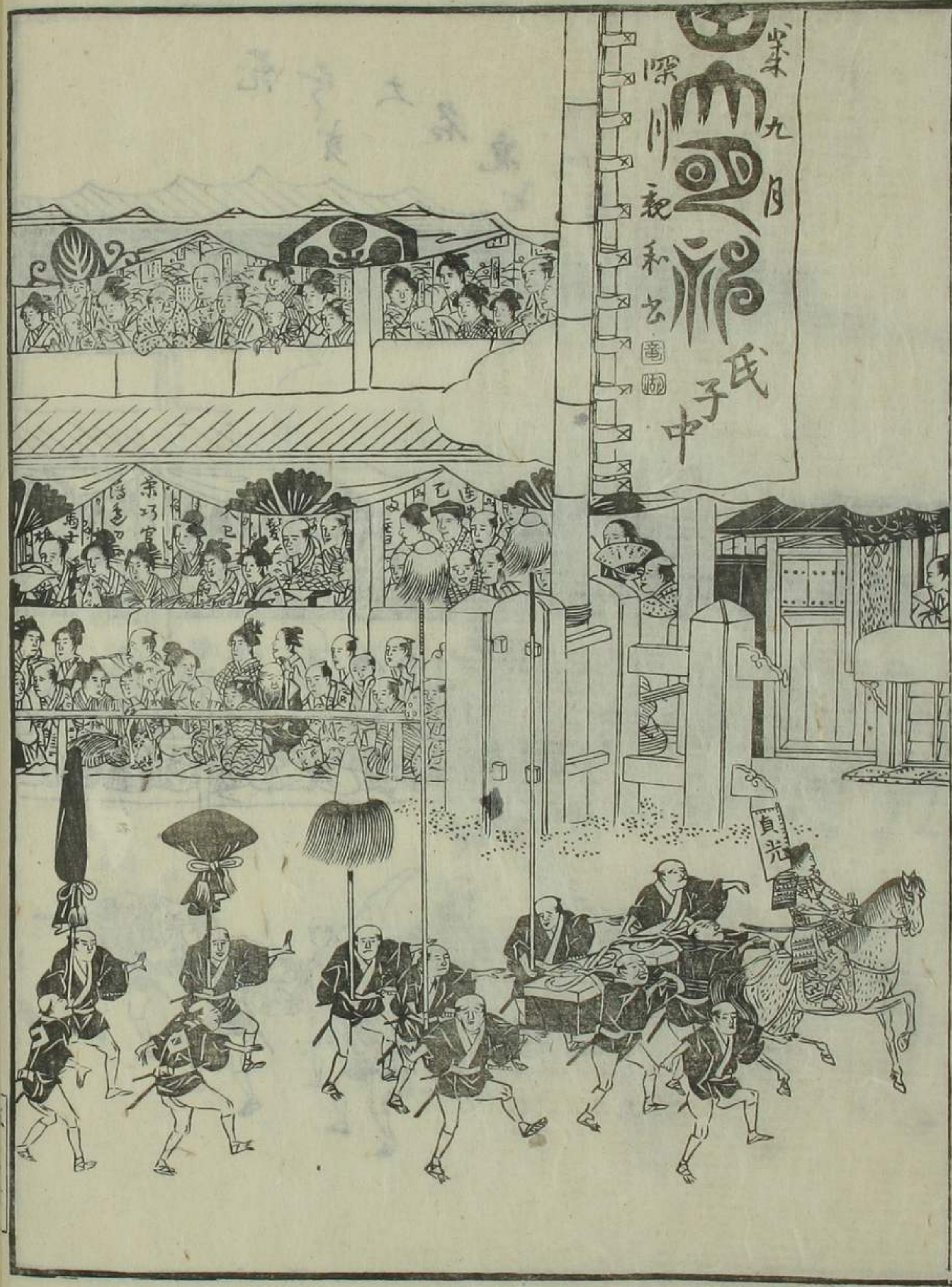
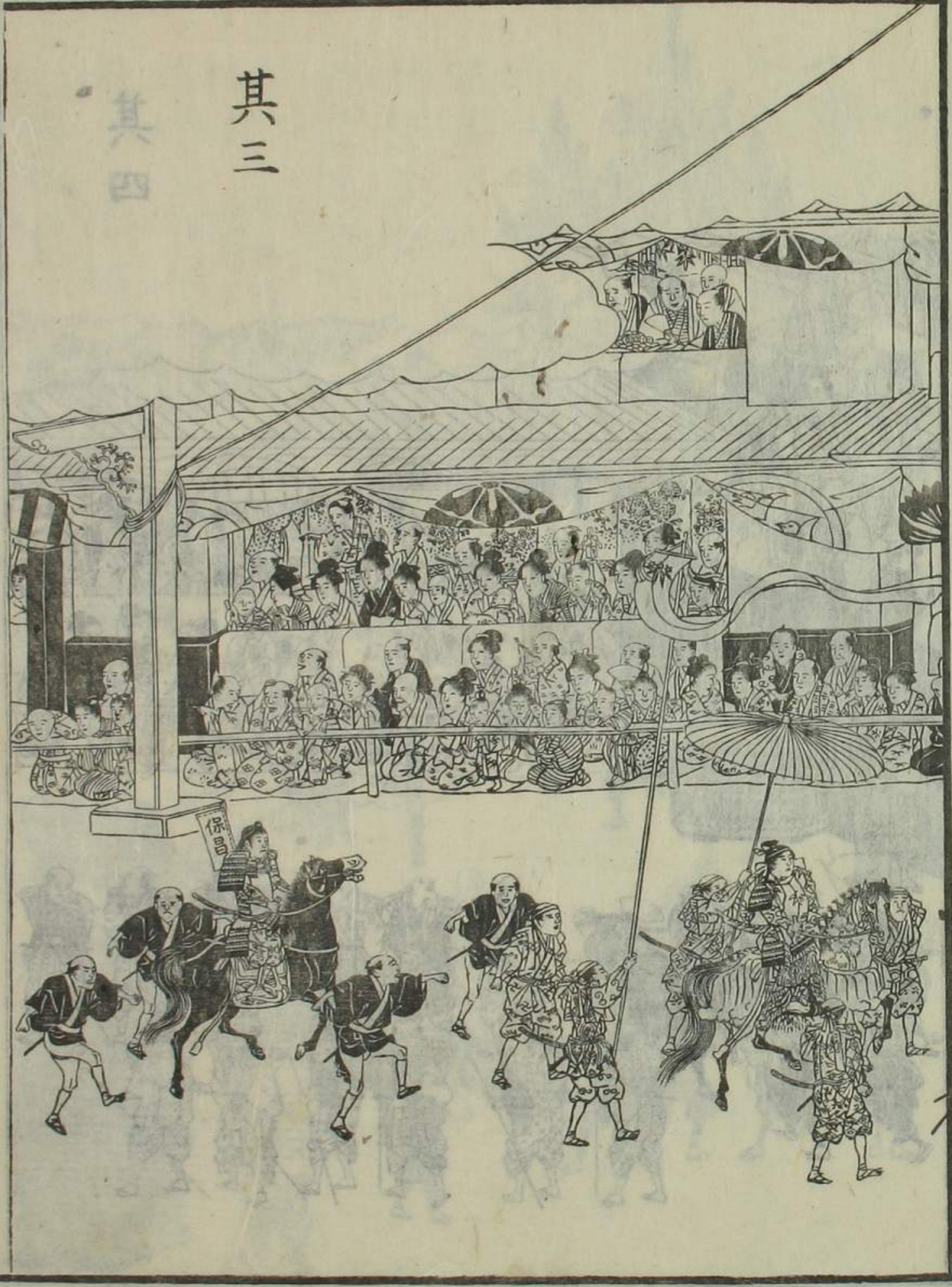
美觀

たり







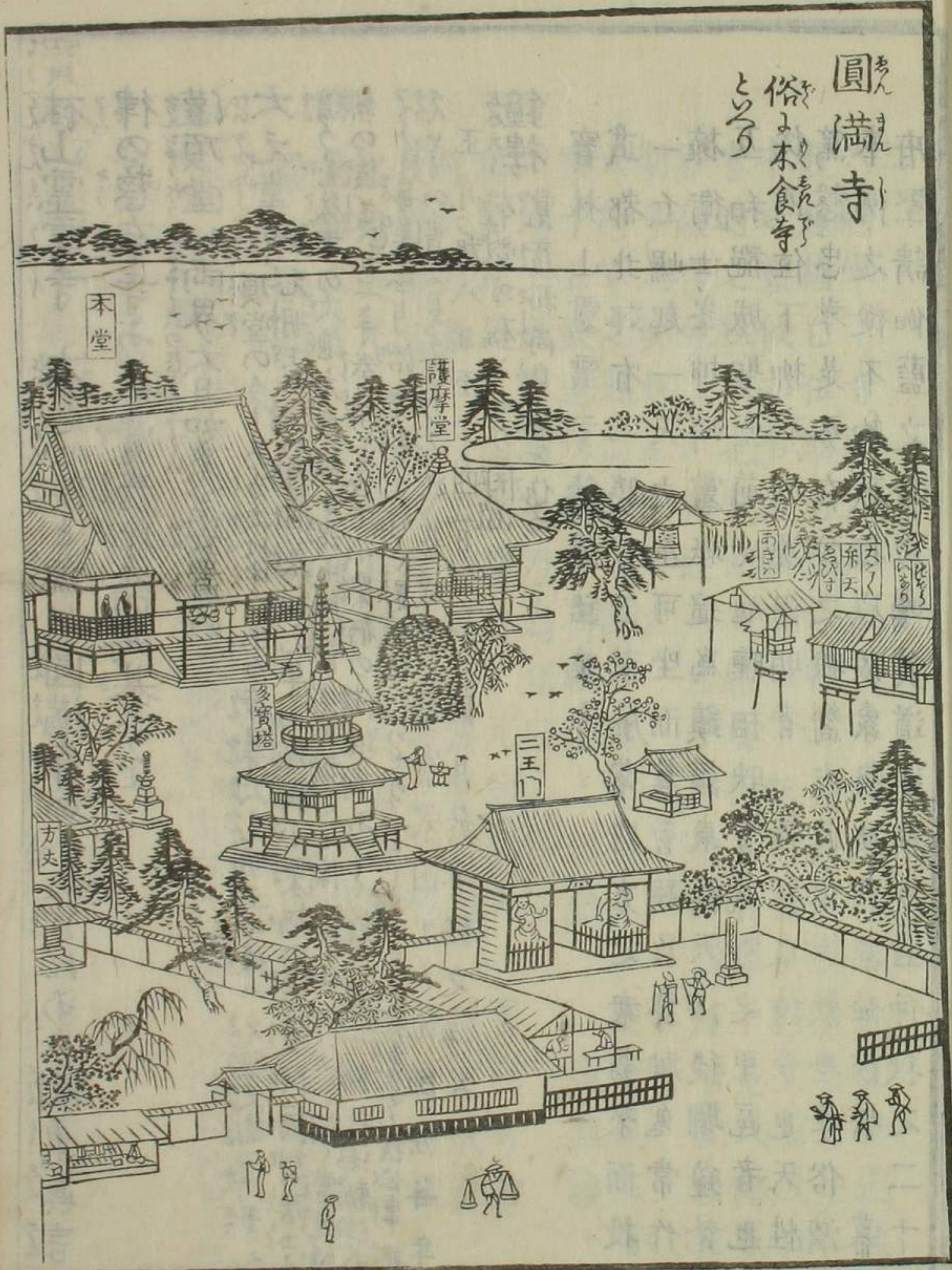








圓滿寺  
俗本食寺  
とろり



江城湯島の地に至り彼佛の教を随ひ諸人れ求に應じて無量を願ふ  
成就し大靈験をありける同七年御室宮へ参るは行法の嚴重なるを  
御感あつて高野山光臺院の住持職に任ぜられ又天和二年七月十三日  
参内を頭中将隆真卿の傳奏ありて光臺院住持職勅し應じ國家安  
全寶祚延長を祈奉るべき旨倫旨賜ふ祖先の忠義に仍て名実の又元  
祿四年志願によつて光臺院を辭して江戸に到り奉郷三組町に住せしふ  
其頃  
大樹 常憲公とて浄光院殿須山女を以て御祈禱を仰附るる室永  
六年上京に此時昇殿を許され同七年江戸湯島の地に梵刹を建てる  
萬昌山圓滿寺と號す  
大樹 文昭公の御志願より本多彈正少弼忠晴奉行たり則上人を以  
て當寺の所山とて享保三年六月七日化縁の勅盡く終り春秋九十五歳  
みして遷化す以上岡山傳の



寶林山靈雲寺 大悲心院と號し圓満寺の小北方にあり關東真言

律の惣奉寺ありて覺彦比丘の開基なり

灌頂堂 兩界大日如來と安置し

大元堂 灌頂堂のうしろ方丈の中にあり奉尊大元明王の像ハ元祿大樹の所筆ニ

朝の法林寺の大徳元照師ハ謁此師常曉の番木を植て此秘法と授け常曉歸

怨等の書ハ見ええり又延喜式云蕃審式曰凡大元帥法毎

鐘樓 覺彦和尚自銘と作る

寶林山靈雲寺鑄鐘銘並序

武都北郊有一勝地四望廓落四方之衆易來而投

擁衛士峯坤峙靈岫遙為鎮護東嶽天澤後聯鐘梵

互和龍城聖堂前岫旭曛相映實武野之甲區者也

從四位下柳羽在公暇嚮志真乘之侍臣也天性

篤佛之忠孝不務戒檢以故象教從今茲仲秋之二十

府堅請伽藍之地以囑貧道使今茲仲秋之二十

木之績倏示告成從四位下始野備命後刺史源成貞

者時之復令工也締造其樓今月初四樓鐘偕就以惟

鉅鐘之興賜而二公醇信之所致也予欲使後生有

斯將軍之欽遵佛制力荷教法上以禱也

感于茲民壽福也乃為銘曰帥資地實比布金

以增士庭壽福也乃為銘曰帥資地實比布金

城北福庭山號寶林元帥資地實比布金

作夫四集役工日臨彌歷七旬棟宇成森

架樓突兀為時股肱命聖畢萃龍鬼熱醒

聲雖本有乍響鏗鉤迷夫天眞何有垠埒

圓性融相誰縛誰泄法音遍益

元祿四辛未年孟冬 地藏菩薩の作あり 左右の脇檀弘法大師あり

地蔵堂 本堂の元祿四辛未年孟冬 地藏菩薩の作あり 左右の脇檀弘法大師あり

開山諱ハ淨嚴字ハ覺彦妙極と號し河易錦部郡小西見村の産ニ

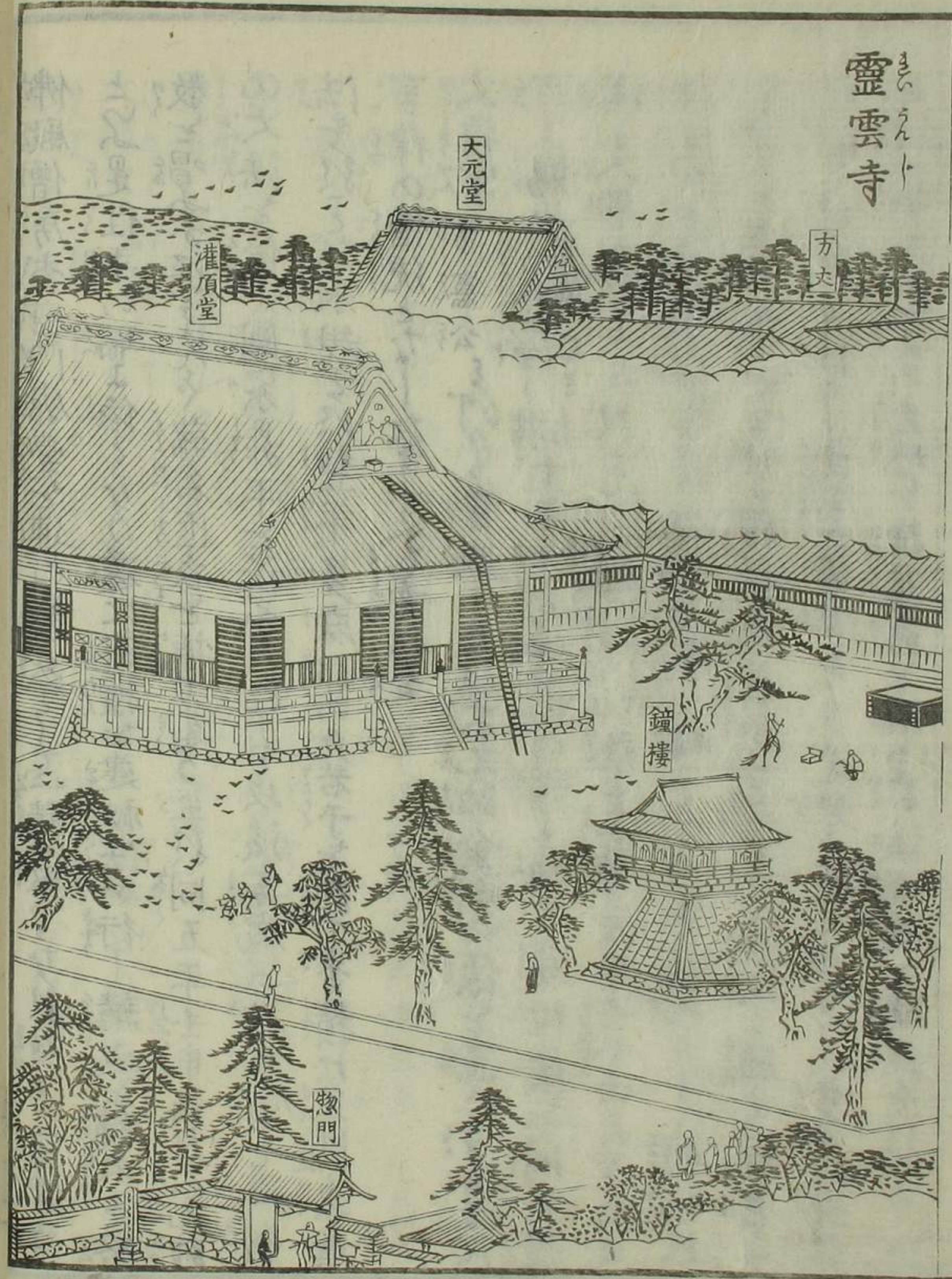
國氏母



後秦 寛永十六年己卯十一月廿三日に生ふ四歳ありて普門品尊勝大  
陀羅尼誦詠奇標穎悟夙因の發る取る凡耳目の歴る取終る遺忘る  
事あり衆人是を神童と稱す慶安元年戊子高野山檢校法印雲雪が禮  
して薙染せ昔に年十歳朝參暮詣倦事なく紀乃亞相公頼宣卿一度  
見たすひく深く是れ器ありとし真みあれ方外千里の駒なりとのこまあ  
遂に真言の諸流れ秘奥を究む又餘暇ありとし孔老をひ諸子百家  
歴史等涉ぎとし俗あり常に法戦の場に臨み向つ取敵あり貞享  
甲子冬錫を開た飛に其曉瑞雲ありて東を指し其色赤黄みて長き  
と數十丈あり和尚の法化將み東方に振んとしるの兆あり一度東都り  
來りてより法鼓に城の下に震る仍も和尚の道香に慕ひ牙子を禮せ  
設り厚くあれは遇はふ輩をくれは元祿四年  
大將軍 常憲公 召見し多く普門品を講せむ雄辨泉の流るがごとく聽き者  
欣然とて善と稱す遂に城を賜ひ梵刹に經始せとしひく

佛殿僧房香厨門廓を連ね巍然とて一精藍なり號す靈雲寺  
とし是れ往年の瑞は依るなり遂に密檀を建せ秘法を行ひ講筵を鋪き密  
教を唱ふ子をんど諸名匠を衣を握りて來り至り同五年壬申六月大元帥  
の大法を修め國家昇平を祈ふあれとし以後毎歲三神通月七日後  
法を終りとし永規とし羽豆年多麻郡の戸若子を割りて香積に充め東真  
言律の僧統となりたまふ又し夏  
大將軍 常憲公 齋戒し多く大元帥金剛の像を畫き奉じ尊に  
下し賜ふ安置し奉ふ同十年丁丑僧俗の請ひ依る曼陀羅を開く檀  
場に入り者九万人あり幾し隔年灌頂を行ふ既に元祿十五年壬午六月廿七日  
諸徒を召ひ遺誠懇なり我今法界三昧に入としひて恬然とく順化し  
世壽六十四僧臘二十七時は顏四十許色相怡悦とて平生は勝り師常に  
弘通を以て己が任と受り取の財帛をとり貯えば又もるに費さば佛像  
を造り聖教を索め堂塔を構み貧窮を濟め若し後に論を講説せばとし一百







妻戀明神社



三十六會殆三十席秘軌と授ふこと五回著述を於所の書三百卷余度を  
 於處の僧尼四百三十六人具足戒を受ふ者十有三人阿闍梨と得る者二百六  
 十八人受明灌頂よ沐する者千六百三十一人菩薩戒を受ふ者一萬五  
 千人其余の法化の奉て數あつたは往哲のいまも發せしを發し先賢  
 志明うたりばふあはるの法化洋々として天下に彌布し王公を  
 下愚夫蠢婦よ至る迄敬仰せむといふことあり今古の傳るるあつたは所  
 實に總持復古の師なり 以上當寺開山傳の要を摘ぐるに記す  
 妻戀大明神社 妻戀坂の上にあつたは治年中回祿ありて後今の妻戀臺  
 あり遷りせしむ

祭神 第一殿 倉稻魂神 第二殿 日本武尊 第三殿 弟橘媛命  
 社傳曰當社を往昔日本武尊東征の頃此行宮の地ありと云々  
 按に日本紀より日本武尊東夷征伐の時妃弟橘媛海氷よ入て野原に  
 登り東南の方を望たまひ吾婦者耶と言ふ見えたり因り考ふに此地も東  
 征の時此行宮の地ありと云々彼尊を鎮奉り妻戀臺ありたまひの意を取て直り



妻戀明神と号すカ多ク今稻荷明神をりつゝ社の號よ  
稱すれと云えども其をりつゝの後世合祭せしかつて  
往昔々社地も妻戀基の下にありて境内をわたりて廣うりてに救度

名兵火小罹り大に荒廢よきし比繞り社の形をりてを殘せり時天正  
年中  
神君當社より祈願の事ありて新二丁四方の社地を賜ふ又寛永五年

台命よとて  
神君の御像を別社に鎮座せし先後  
湯島天満宮 妻戀明神の小比方より右田道灌江戸の静勝軒より頂

文明十年 夢中に菅神よ謁見せ翌朝外より菅丞相親筆の函像を携來る  
者あり乃ち夢中神を其所の尊容に彷彿せし比以て直に城外の心に祠堂を

管彼神影を安置し且梅樹數百株を栽美因等を附せ即當社是あり  
以上諸社一覽江戸名所記等の書よ出かるとも思ふ誤りしむ勘町平河天神に

菅丞相直筆の函像と稱するものありて之の當社に此影あること其論  
あはれとて室  
北国記の  
武藏野の遠望を懸たふに寒村の道より野梅盛り薫ばまれば  
忘るる東風吹むを之の神を挿る 亮惠

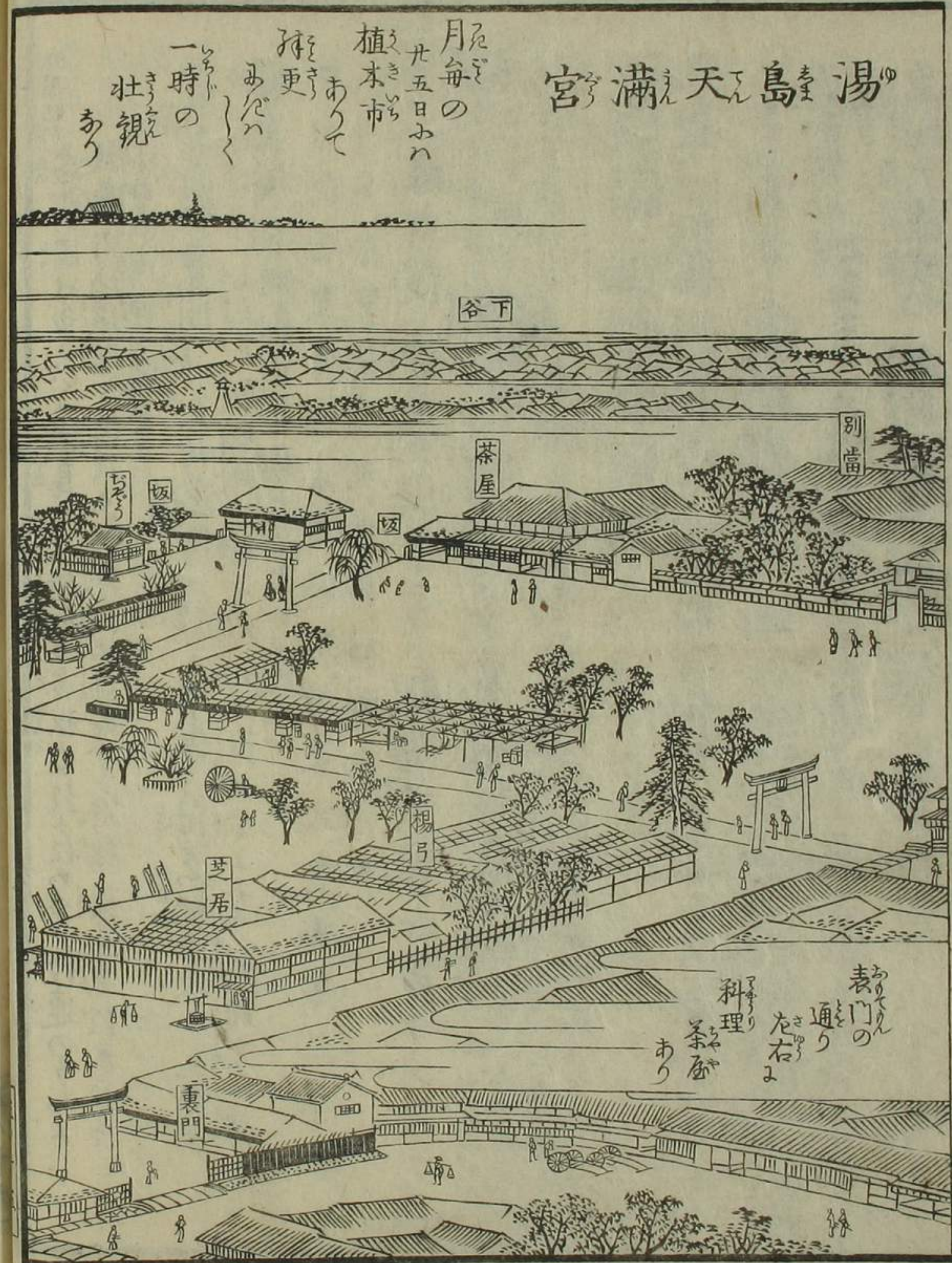
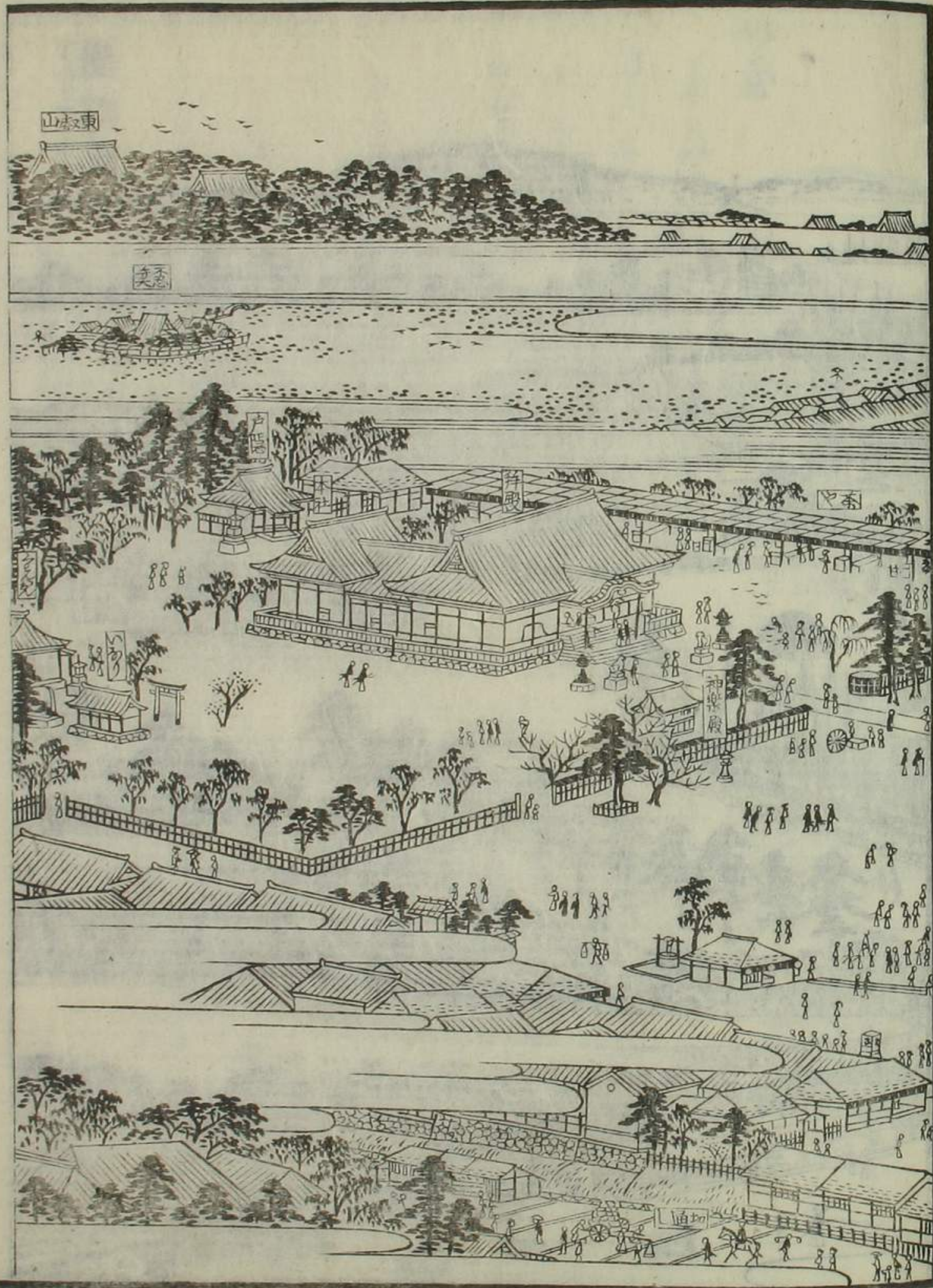
湯島神社 五ノ戸隱明神と稱す本社の後れ方より則ち地主の神あり  
風土記曰豊島郡湯島神社雄略天皇御宇二年癸巳  
八月自官取祭天手力雄神也云

天澤山麟祥院 同所北の方よりあり臨濟宗江戸四箇寺の一なり  
恩山天澤寺と稱せしが春日局の本尊ハ釋迦如来円山ハ渭川劉和尚  
法師を取て麟祥院とありしむ 三代大將軍の乳母人齋藤利三の  
京師花園坊心寺 本願は春日局あり 女あて稲葉慶正成の室あり寛永

寺傳曰寛永元年甲子 二代大將軍の 命よつて當寺を春日局  
を菩提所とて且其殿閣をあらに移し 天和二年回祿を其以前の禪今十八  
等皆雲谷 同五年 三代大將軍 不豫よりあせられし比局自ら

東照大権現の 神前より詣りて禱て曰妾が身不浄ありとても苟も乳







鳥九光廣卿

そへは

光り

朝日れ

よもて

かあろ山

わくくの

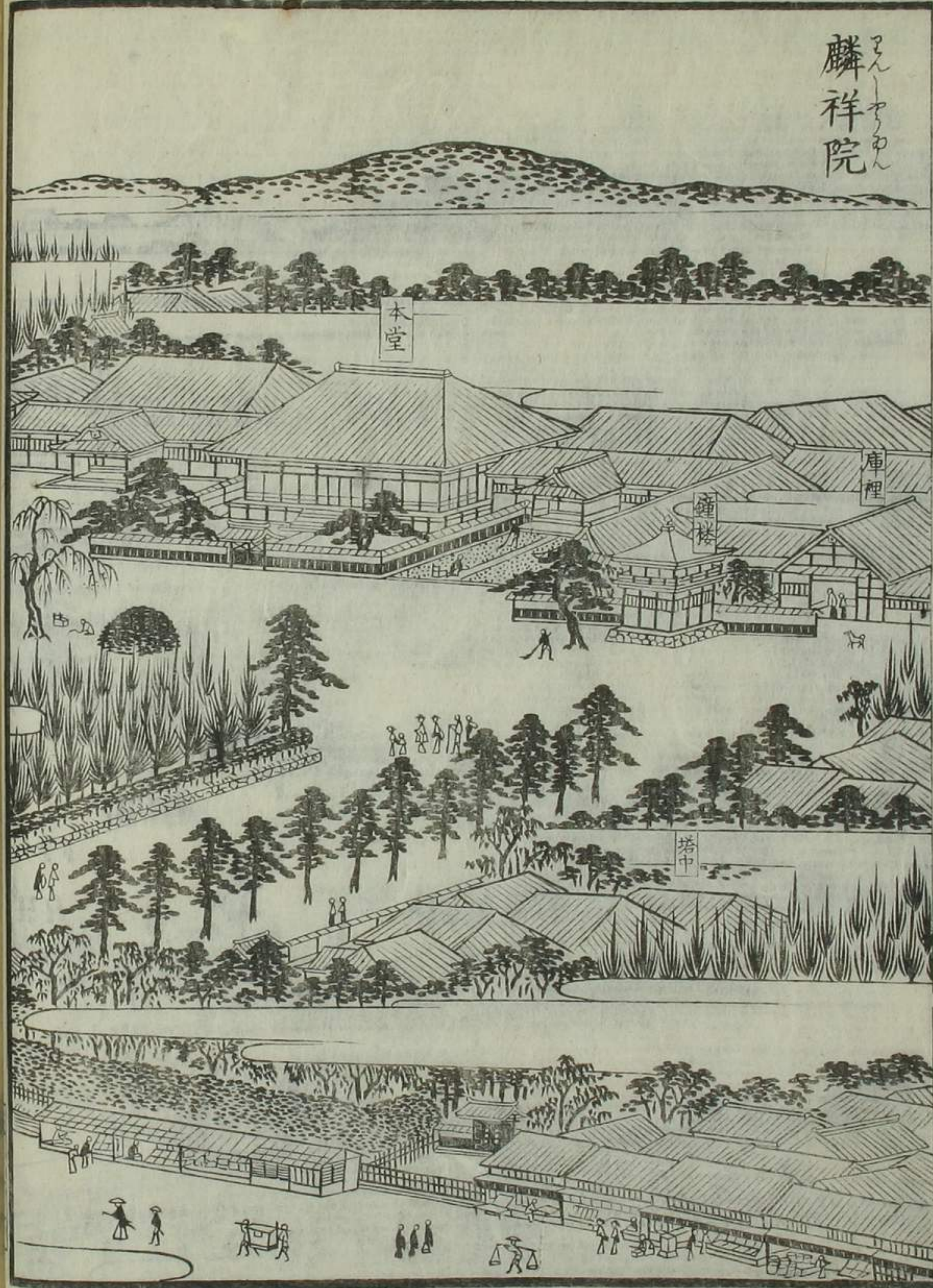
まみの

あうた

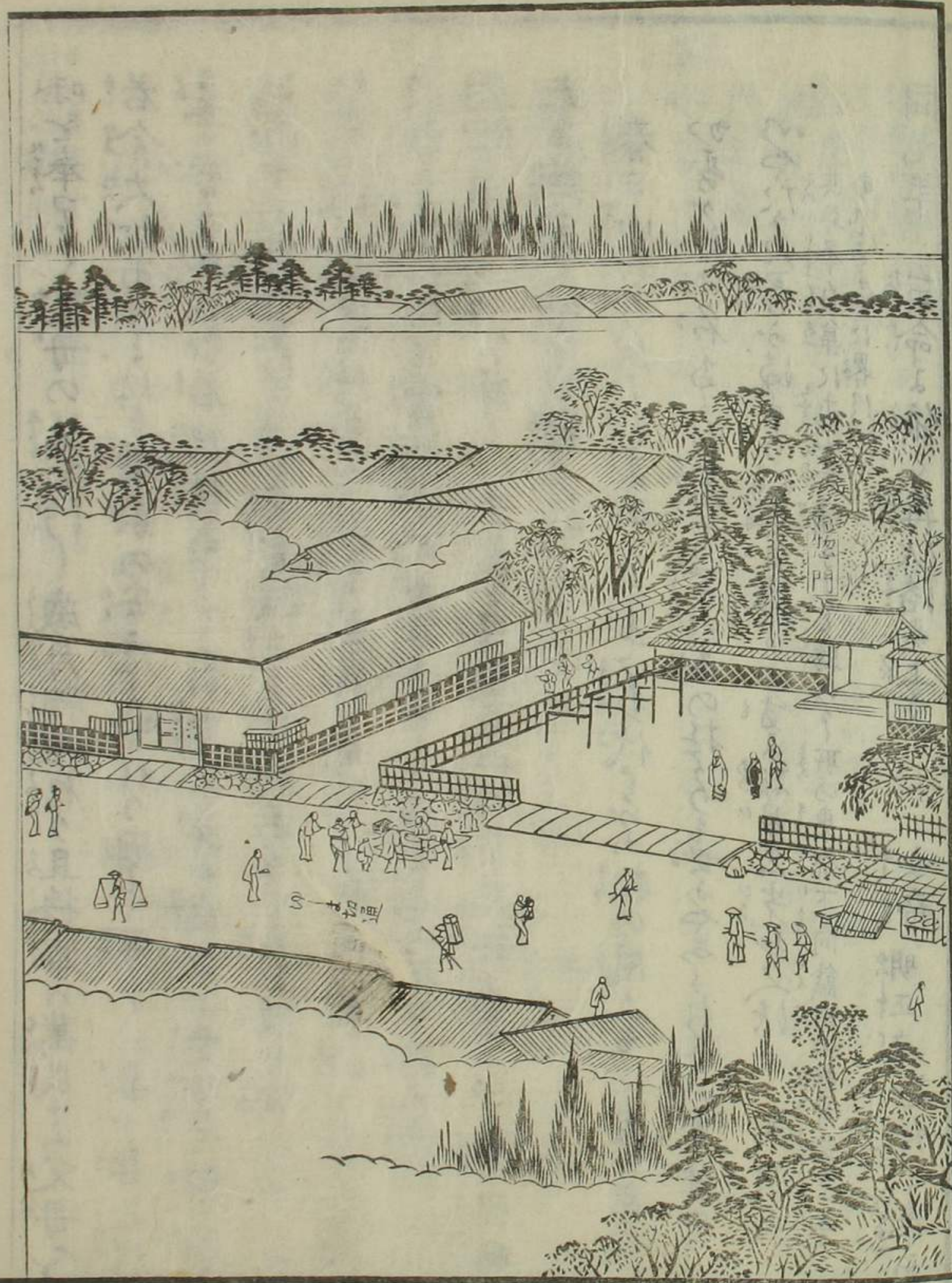
以屋



麟祥院







根  
生  
院





味を奉る乳母の称を汚し歳月祠奉れり且將軍の萬民を父母之  
若今大故あふれらるる國家の安危はわづらひ願ひの妻が身を以  
是より替り奉らむ若快復あつてわづらひ忽に身も病苦を受誓て醫藥  
を用ゐして死せむと云 云其衷誠正は感應ありて日を経て常にありせ  
たまふ仍く身を終ふまで針灸藥餌を用ひばて我同六年洛より上り春内  
以西三条大納言實條卿兄弟弟準せられ春日局の号を賜ふ遂に  
天顔 後水尾帝と拜し 天盃を頂戴せ此時良尚親王あつて實條卿  
光廣卿とて和哥を贈らば  
春日山其名はよもあつて代を松の風も 良尚親王  
かまが世の名あつた名なり紫の柱も世あつたれん 實條卿  
心たつた君が海より日るは朝日光也 光廣卿  
其外奉白集に大山長嘯子と賜らる所東都下向餞別の和哥詞書等  
あれどもまことに異れ

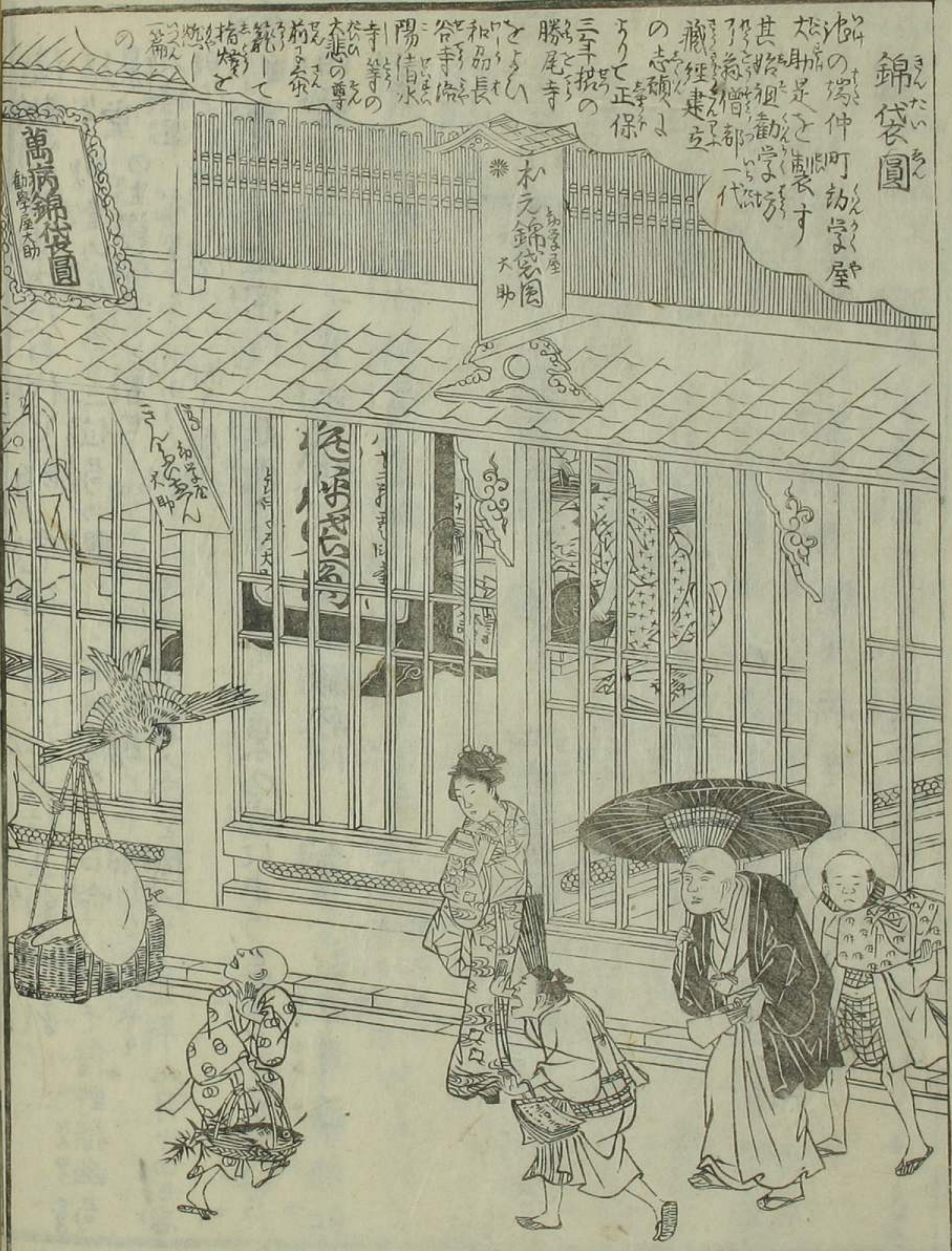
同九年 台命は依り再び洛より上り 女帝 明正帝と拜し奉る

後勤勞歸休のため代官町は宅地を賜ひ従二位に叙せらる  
景堂 奉堂のたより二位局の親影を置此像は 台命に上つて狩野探幽局  
大將軍 命せらるる唐草の織りに世壽の字を織入り毎年九月十四日忌  
日たふし園に法燈を置き齋詣を免れ  
金剛寶山根生密院 延壽寺と號を同東の方にあり真言新義江戸  
四箇寺の一にして寛永に始 御祈願所に 命せらる奉尊藥師如  
來の佛工春日作脇檀に十二神將の像を置崇善法印 春日局の松と川と  
岡山と  
不忍池 又篠輪津 東叡山の西を麓はあり江州琵琶湖は比也 不忍池の岡に  
廣方十丁許池水深ありて早魁おも濁るとを殊蓮多く花の頃紅白咲亂  
天女の宮居はこれ蓮の上より湧出するが如く其芬芳遠近の人乃袂を籠る  
風土記曰豊島郡篠輪津池貢鯉鮒鰻魚鴻雁鶴鷺  
鴨等周行十里許程早日本不涸霖雨不爲害祈旱  
兩人詣于茲所奈瀬織津比咩也云云  
中島辨財天 不忍池の中島はあり當社に江加竹生島のうらみあり





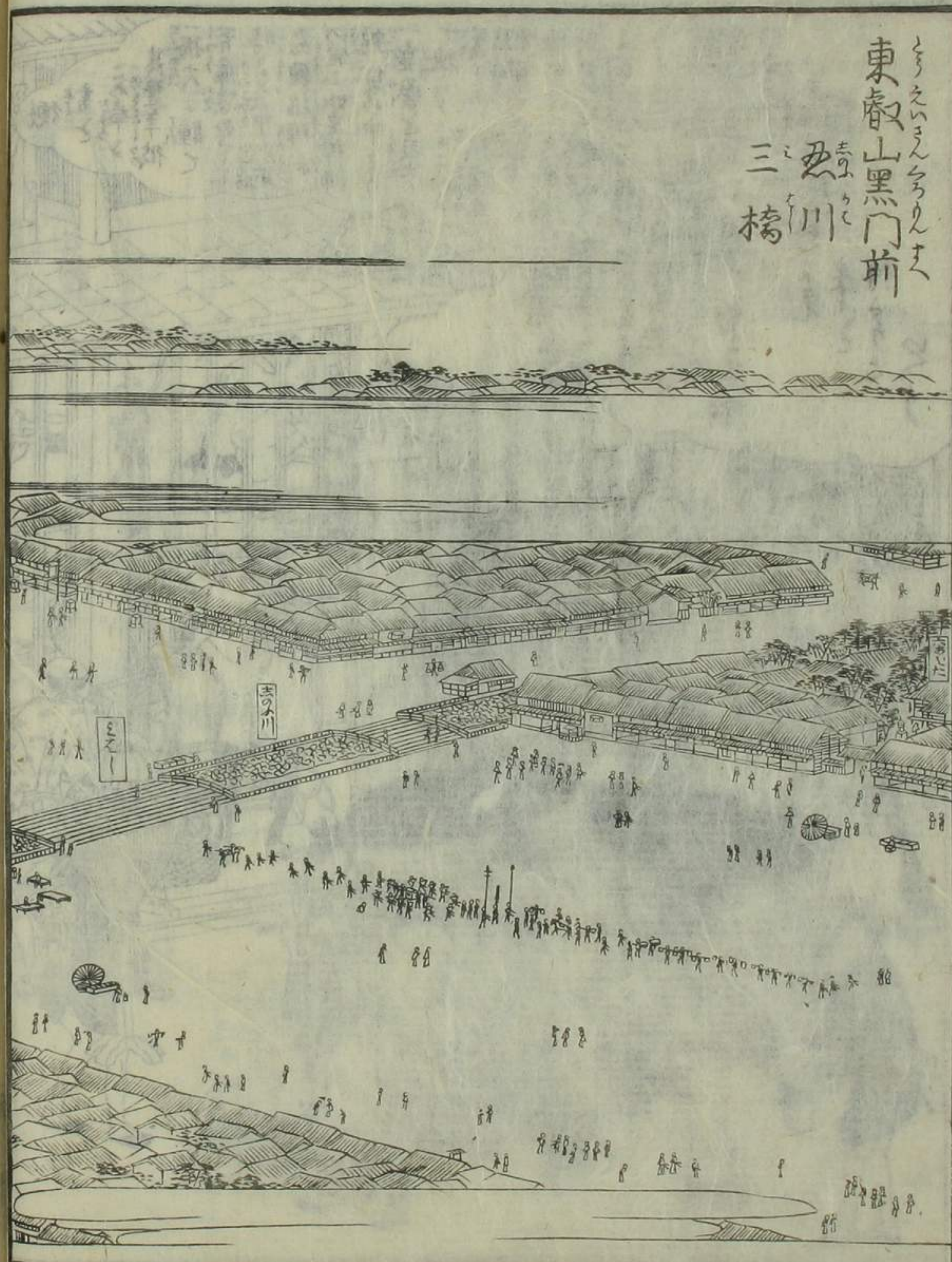
書と  
其の奉る  
一振大に腫て  
若痛甚か  
時中肥前  
必興福神  
錦袋の中より  
一霊薬と取  
て投らんとす  
差さる後速  
彼薬を製  
服せし其指の病頻み愈  
也其後衆人の患者は用  
る百人必百愈せんこと  
一病錦袋圓と号彼  
靈薬と製一驚て竟其價  
の余は建立の料は表  
得たりと  
り



錦袋圓  
此の傍仲町幼學堂  
其の奉る  
三手拵の  
勝尾寺  
谷手長  
陽清水  
寺等の  
大悲の尊  
前々宗  
指燈と  
の

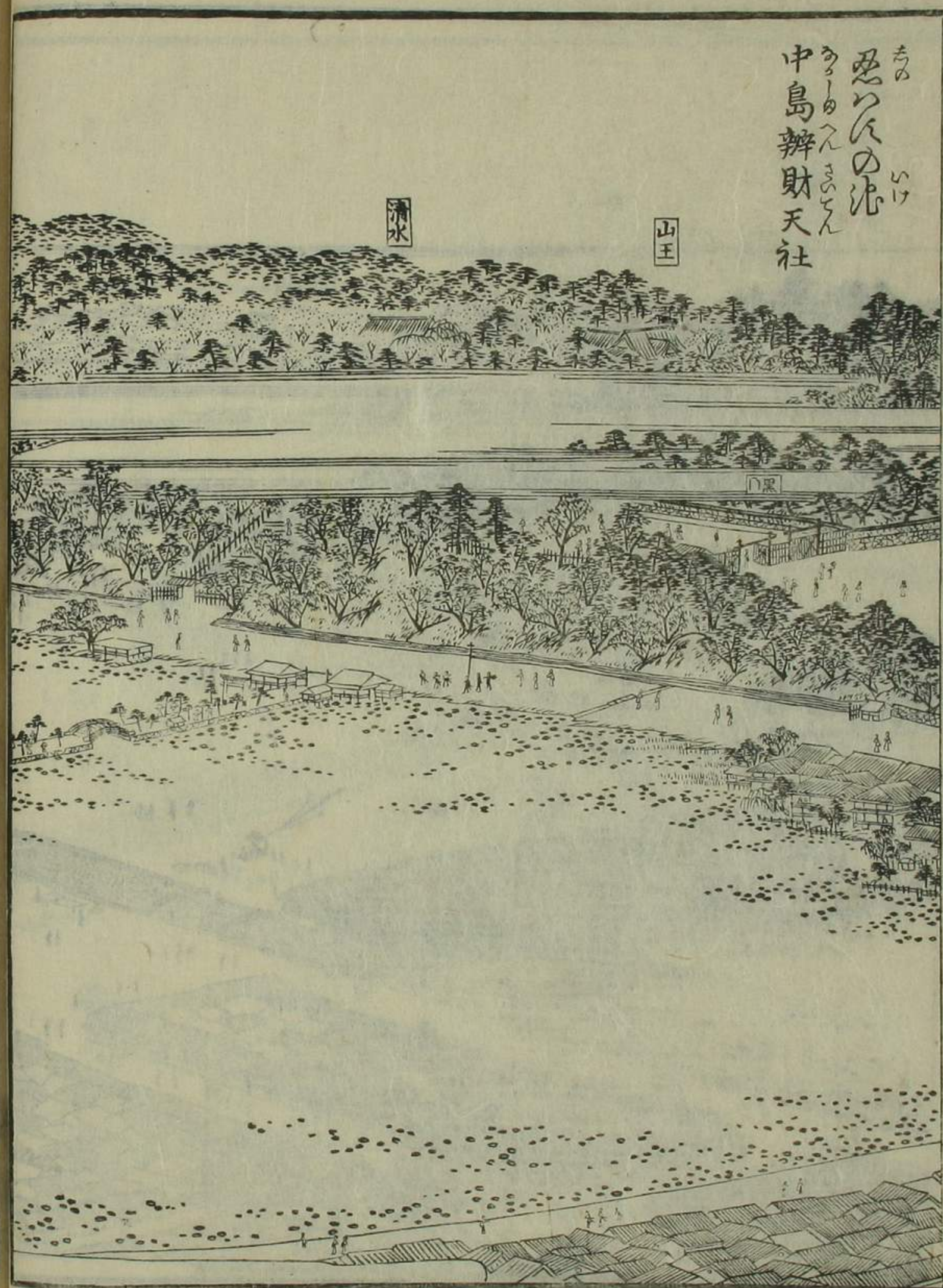
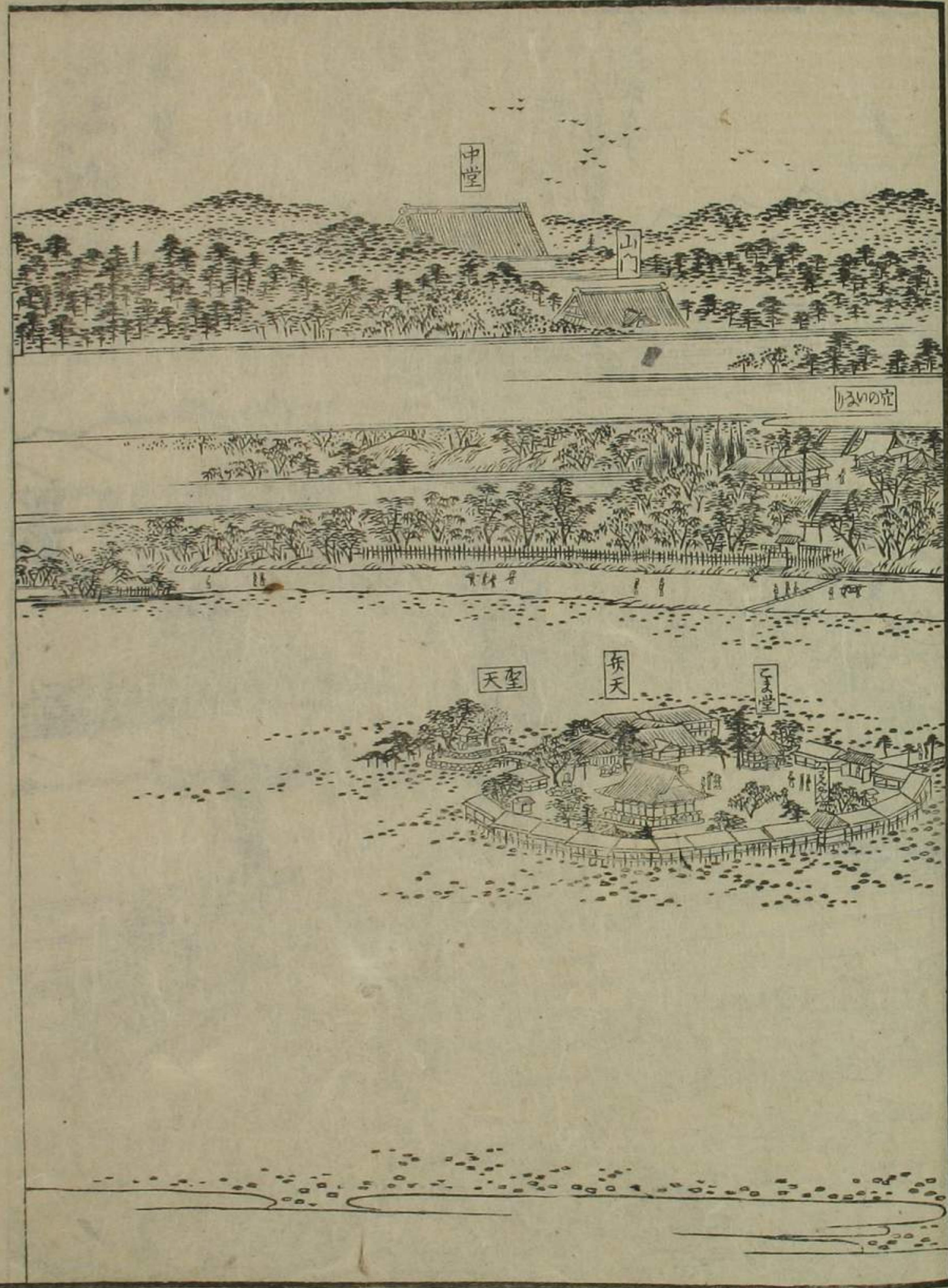
萬病錦袋圓  
助學堂  
おえ錦袋圓  
天助



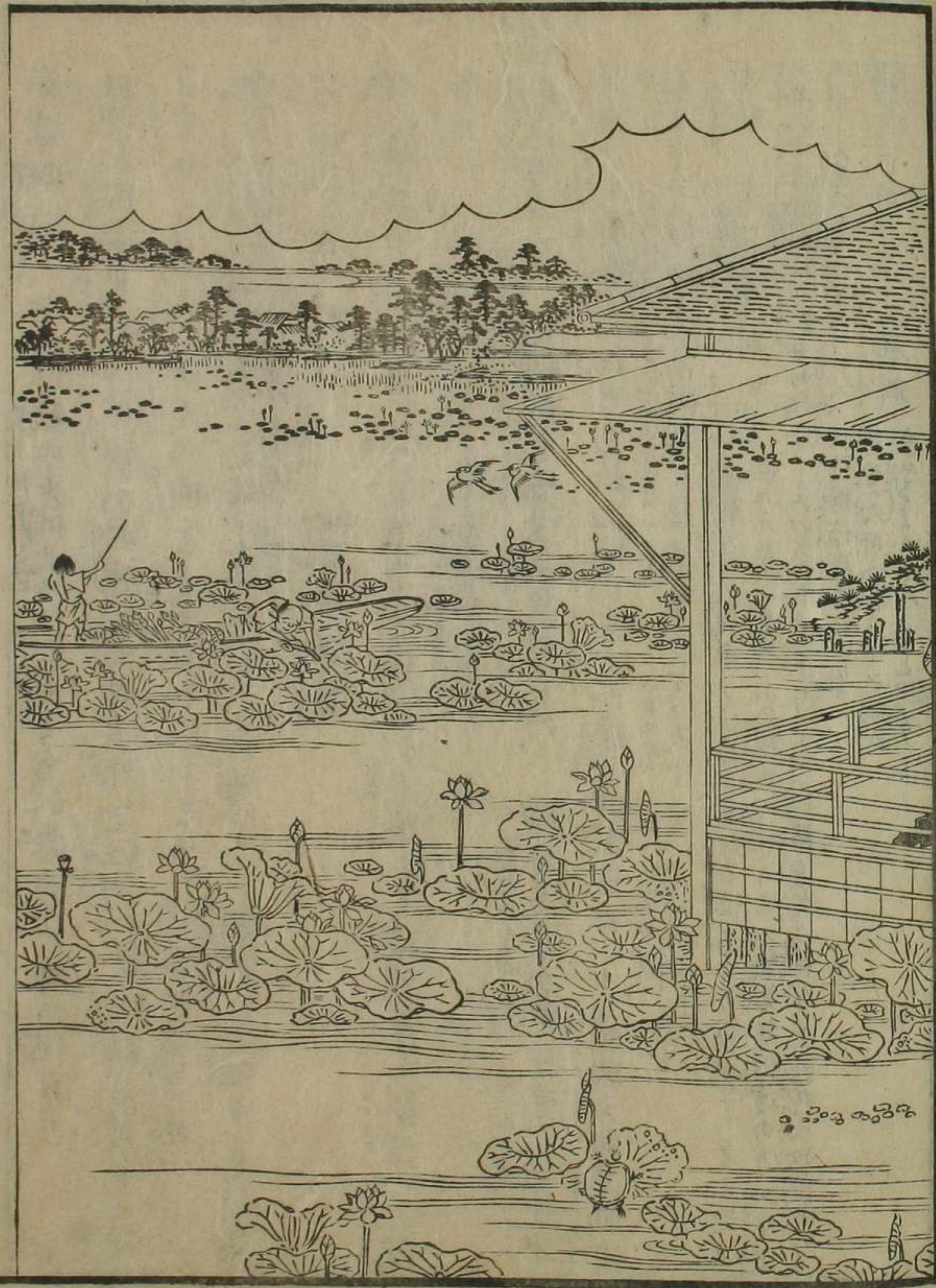


東叡山黒門前  
 三橋川  
 三橋川









たのいそいけ  
不忍池  
蓮見

きつねのいけとよらち  
不忍池の府東一の  
蓮池も夏月にこれい  
け系系もとて水上  
は番行い花の紅白  
色とすかかか人を  
おち小蓮をもしす  
の華凌展とす文  
の清観とす



本尊辨財天と云ひ脇士多聞大黒の二天とも慈覺大師の他あり

社傳曰往古東叡山草創の時慈眼大師此池を江列の琵琶湖みまをら新

又中島を筑立て辨天の祠を建立せられと云 建仁寺記云水谷信安

聖天宮 本社の北の方小島勸請す此島其始天の祠あり 舊池あり其頂由この聖天の宮

紫銅華表 額 天龍山 細井廣澤筆

昔の離島小一て私めて往末せしを寛文の未陸より道以築て糸清の人便

あらし己巳日の前夜を糸清群集す

東叡山寛永寺 圓頓院と號す人皇百九代 後水尾帝の御宇寛永年中

比叡山延曆寺に比せられ江城の鬼門を護るの靈區として慈眼大師草創有

爾より己降代々一品法親王座主として今天下才一の林刹たり

中堂 本尊藥師如來 傳教大師の他あり 正五九月十二日一山の僧徒出仕ありて大盤若經薄讀あり此堂中

天井の中央小畫ける龍あらはにうしろの壁に寄せる不の十六羅漢等の像はとくに特許永叔の筆あり

又同天井の左右小畫せる天人の特許探信探聖の兩筆あり

脇士 日月二天十二神將 慈覺大師の他あり 特許永叔の筆あり

脇壇 不動明王 智澄大師の他 多聞天 定期の作

瑠璃殿

靈元法皇震筆

# 湯場履

額

竹基 廊門のうらた依あり昔慈覺大師入唐の時五基山の竹を根うに推考して歸朝の

あつとす 盧屋と云る書と見えたり此の竹と山玉権況と云ひ八百萬神の影向あり

ともいふ 又同 天井の心腹頭鴛を畫りて特許探信

廊門 探聖の兩筆あり

額

# 前光

後水尾帝震筆

雲水塔 中堂の前右の方にあり本尊小釈迦多宝兩如來の 二十番神社 當山の護法神あり

又山慈眼大師建立 轉輪藏 中堂の前右の方にあり一切経を収む前に傳大士と云ひ普賢

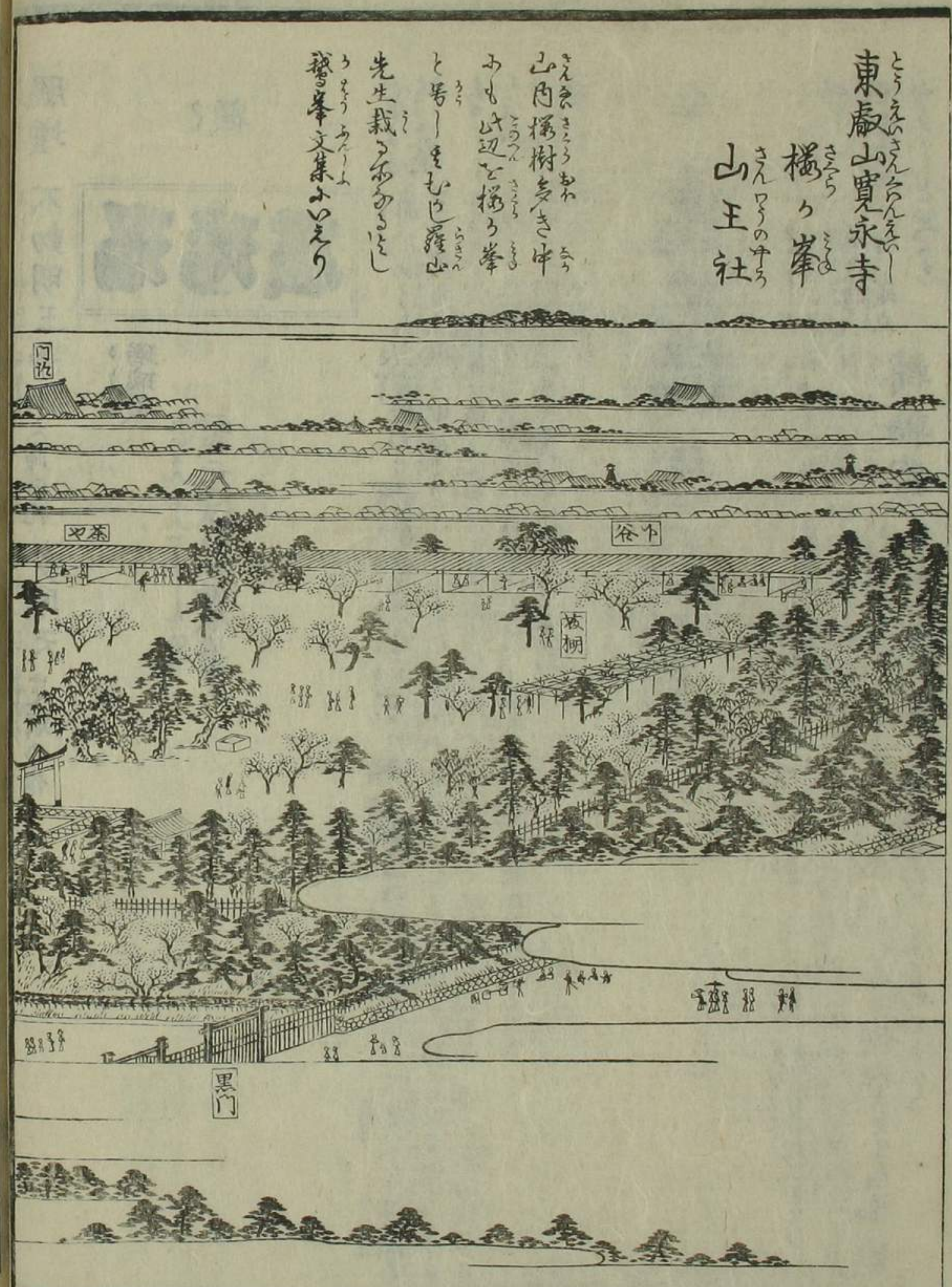
ありと云ふ 普城の像を置この堂の水府公の法建立あり



南郭  
東廠山上陽春衣  
東廠山下背花歸  
回看終日醉歌處  
風起晚來爲雪飛



東廠山寶永寺  
橋々峯  
山王社  
山内橋樹多き中  
少も此辺と橋々峯  
と昔しをむじ羅心  
先生裁ふあふさし  
我輩文集小のり







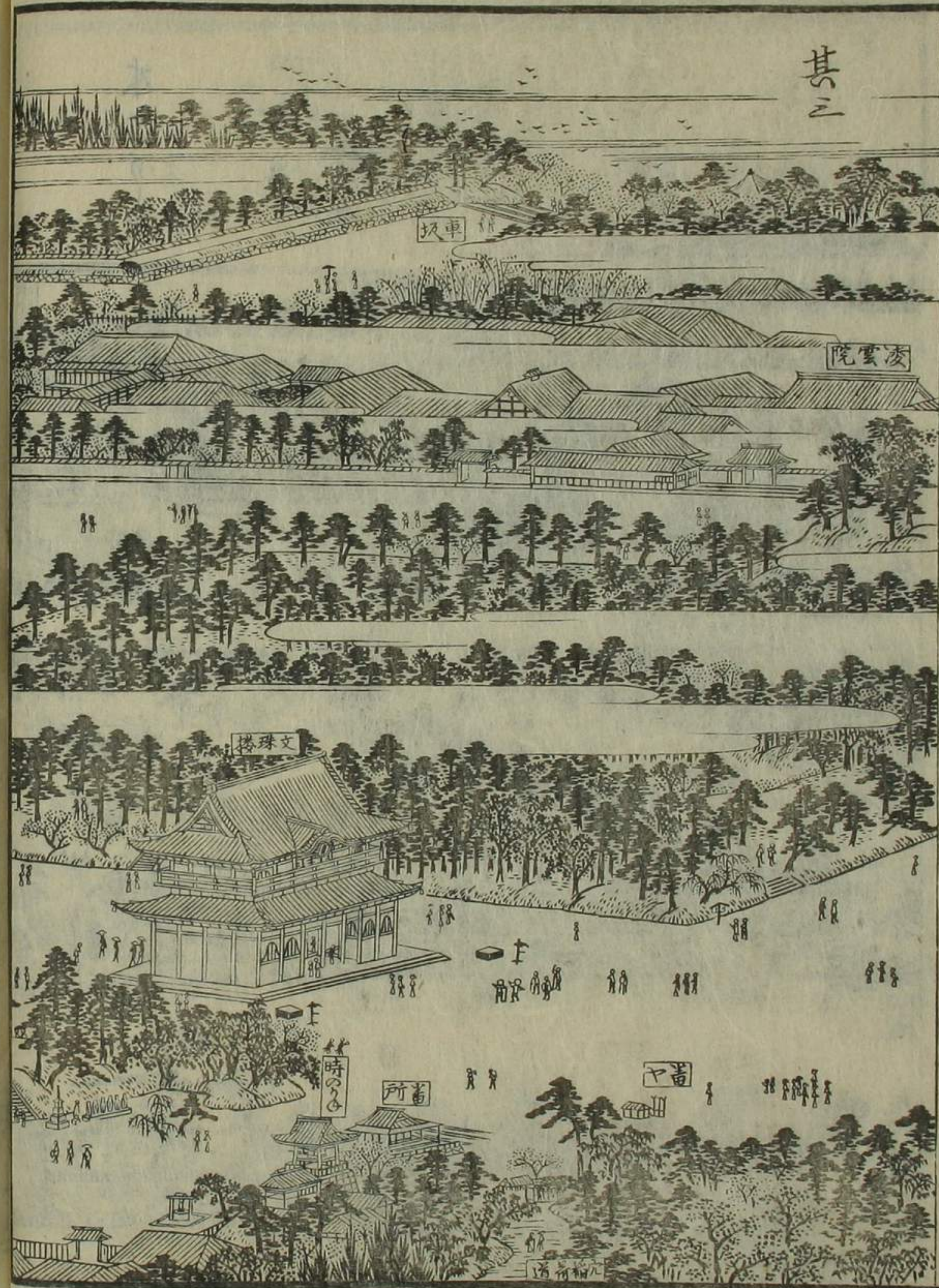
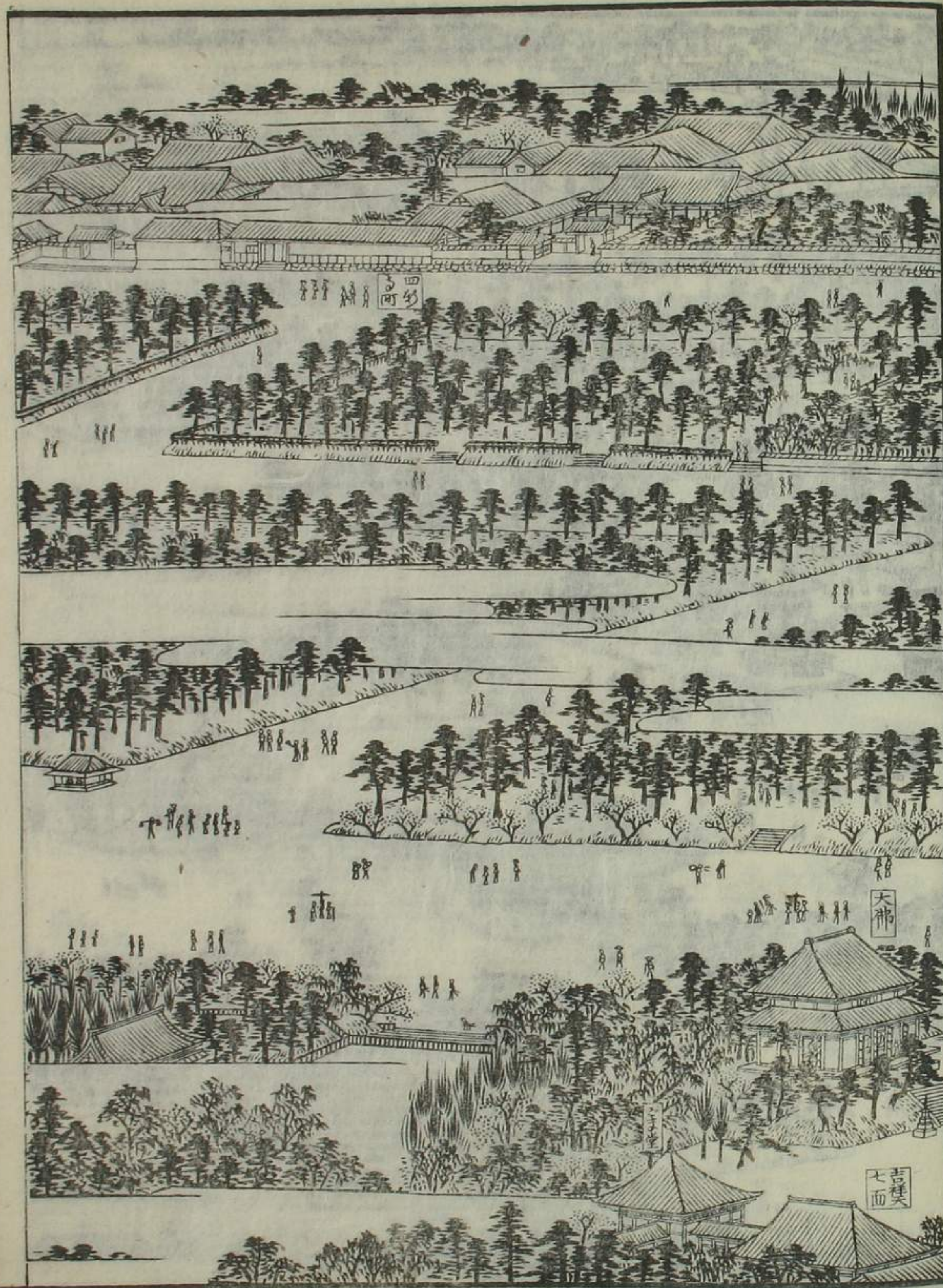
其二

清水觀音堂  
秋色樓

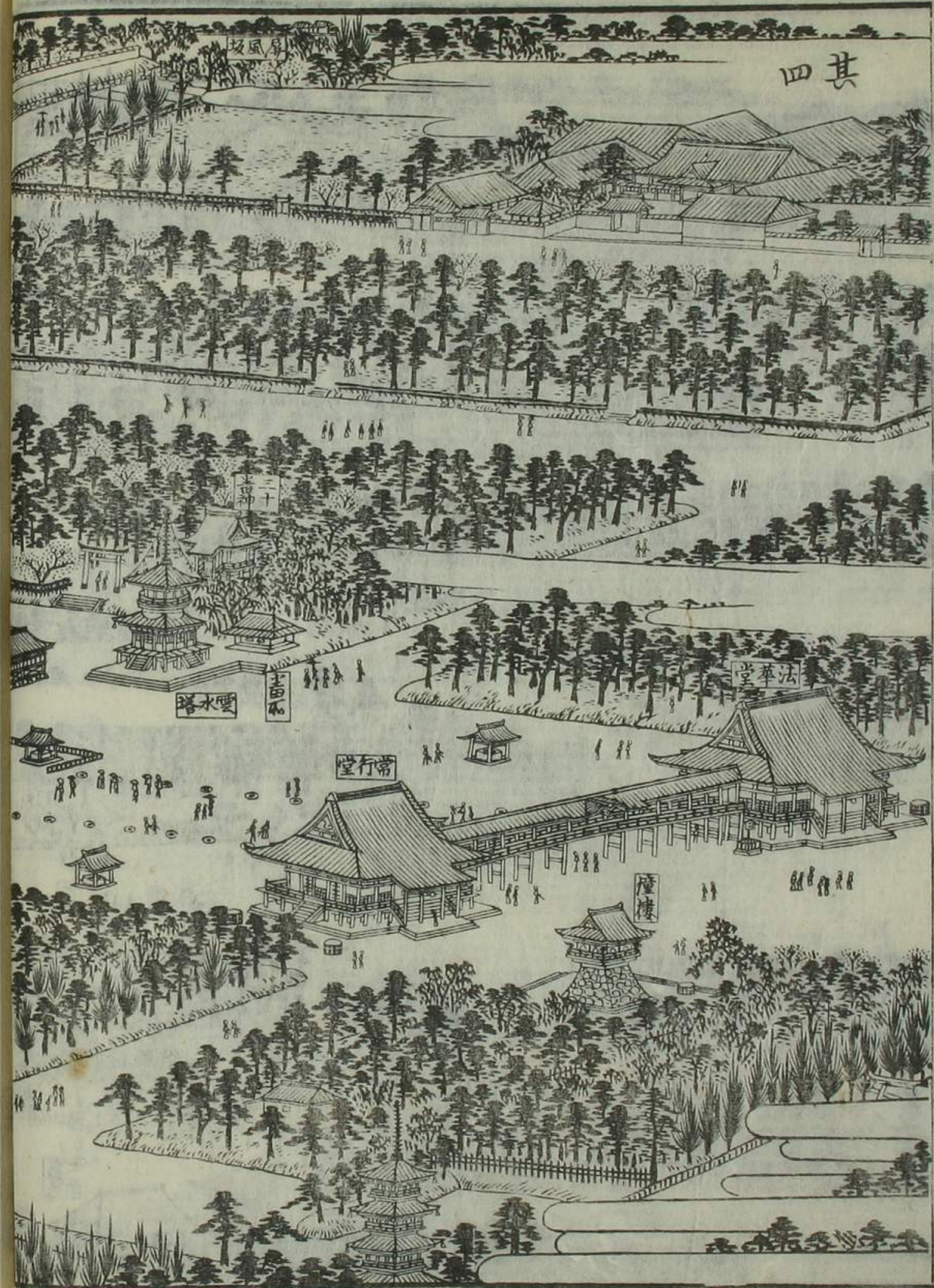
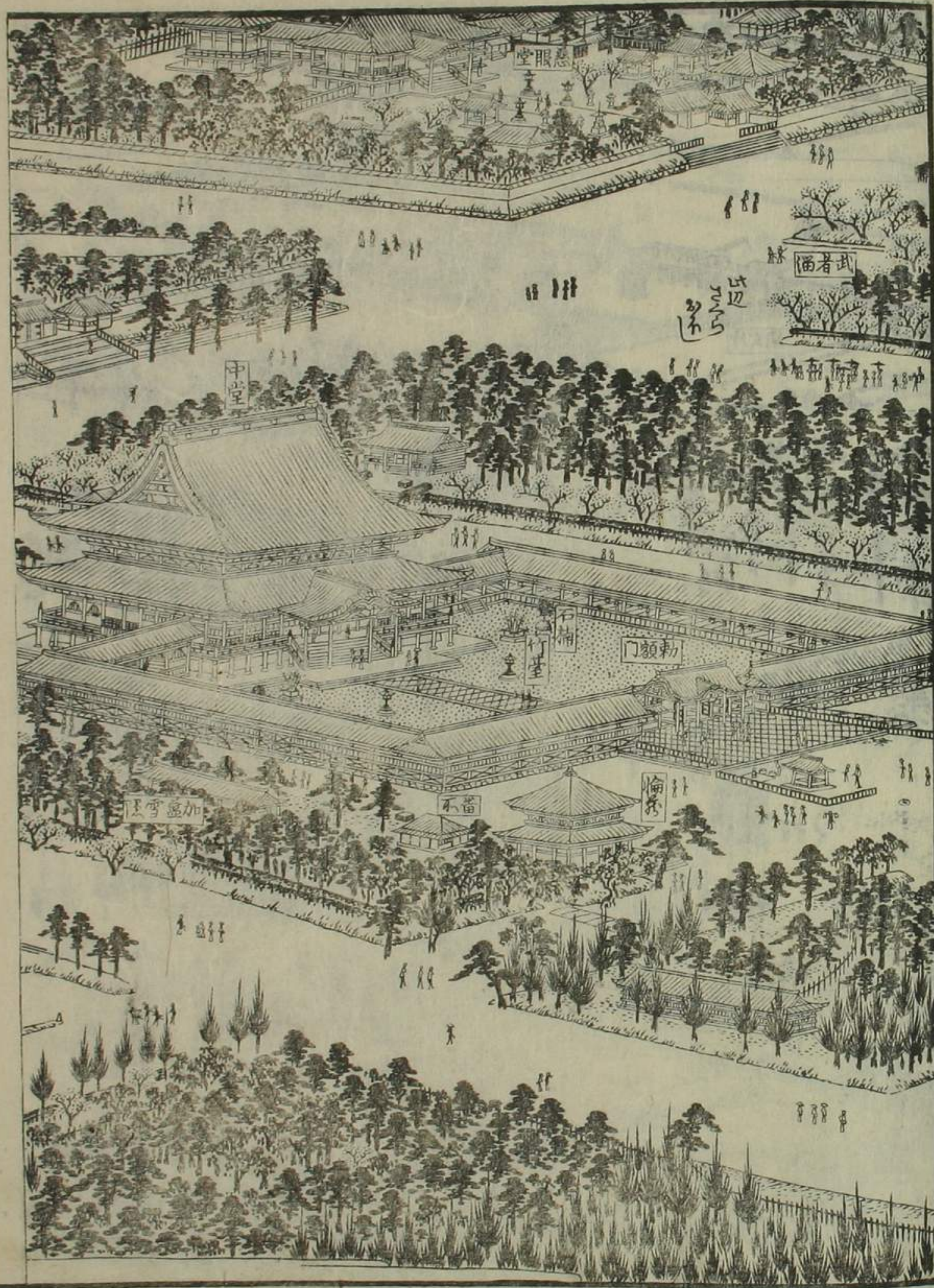
秋及櫻の清水堂の  
所供所梅のうら  
井のわさくらあり  
花のいろはて虎尾  
と梅すのりあり  
中頃に府の南戸  
行某の女秋及と  
いふののたのころ  
らふあり井戸の  
の極のよみ海の  
碑といふ秀か  
のり

名つくと  
らん







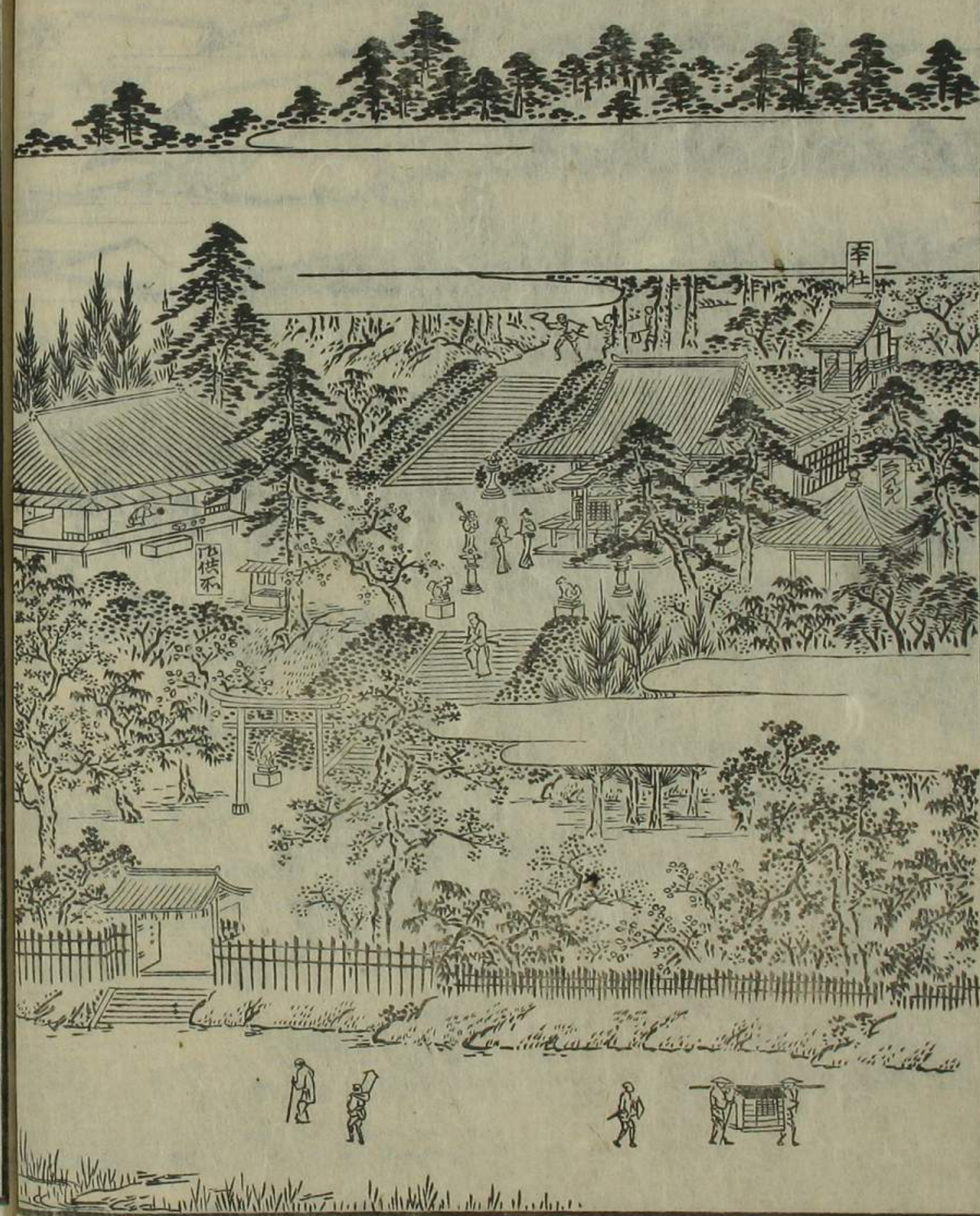








社前縮岡忍



法華堂

申堂の前右の方あり普賢菩薩と安を毎年日月常行堂あり

たの方あり阿彌陀如来と安を毎月二月十六日涅槃會修あり日持聖常信の

筆は涅槃の畫と云ふつせり此堂ハ尾州の建なり  
摩多羅神常行堂の中ハ小幡清き依てこの堂の依の方ハ華表と建り修りていむ世古  
最澄入唐の抄とある一名ハ摩多羅神中ハ現れて曰く我がと護ると云く仍て風帆はるき  
鐘樓 同くたのり土井大炊侯の建なり銘ハ林羅山先生是と修らるる言據

武州東叡山鐘銘并序  
江官相良維一鐘銘并序  
告大相以欲奉營誠是靈區也叡山大僧正天海  
照力成神君之原功廟由是伊賀羽林次將高虎雇梓匠  
之廟大成土木之舉世皆崇國悉敬此時貴戚之群  
祖大繼孝之本或列舉高堂或設輪藏加信美既而  
濟共其志心亦建立院宇而於利勝建五層  
寶池奉朝各同其心夕霽可盛事矣是利勝建五層  
塔意風霜有日瓦甍猶新如峙于空似涌自地然今  
神奉祝之寶筭新鑄之體外中樓伏願此丹忱  
為國奉祝之寶筭新鑄之體外中樓伏願此丹忱  
相惟寶筭新鑄之體外中樓伏願此丹忱  
保其國奉祝之寶筭新鑄之體外中樓伏願此丹忱  
感應之黃公祝之寶筭新鑄之體外中樓伏願此丹忱  
一天之曙色喉鶴應霜永延之遐齡庶幾乎開

大

一感天曙色喉鶴應霜永延之遐齡庶幾乎開



神 東不在風 德同州寶 陶鑄塵池 聲教遠聞 仰祝壽久 國家壽久 寬永八年 龍集辛未 秋九月 日侍從 源朝臣 利勝 鐘 靈庇閼宮 人天俱拜 靈石構樓 拘籃高掛

東照大權現宮 大石燈籠 治工 太田駿河守 寬政二年庚戌五月 下總國古河城主大炊頭從五位下源朝臣利和

東照大權現宮 文殊樓の後 大石燈籠 一丈二尺棹石三圍京師南禪寺尾州藝田

大佛殿 寛永八年孟冬十七日 依久留大権現宮之とあり 大佛殿 寛永八年孟冬十七日 依久留大権現宮之とあり

鯨鐘 牛頭天王社 寶光堂 文殊樓 會津の法苑より 移させり

額 吉祥閣 大明院宮公辦法親王真筆

忍岡稻荷祠 文殊樓の左あり 石崖の上小祠あり 俗穴稻荷と号く 當山草創の 記せり 淨雲と本食淨雲の字あり 按るに 忍岡大師勅使の後 此沙門再興あり 淨雲稻荷と 清水觀音堂 京師清水寺あり 舞臺造りあり 此堂は 文殊樓の舊地あり 長門本平家 勸學寮 俗に百軒長屋といふ 池の端錦袋圓の元祖了翁僧都 天和二年小建立を四方小 檀所なり 講堂 日く三教の書と講を 講堂 日く三教の書と講を 天和四年小建立を中一代法經と收め 崎陽興福禪刹の定住師 經山寺より齋奉あり



東叡山

勸学寮圖



不預子前人別示本士藏內中盡以親大講聖萬不自武  
 壞備其有聽設不院之奉後築已近乘院之行皆古州  
 衆金庖丈知講云衆塚左聖藏祖唯礙行翁此利菩不  
 可一福院三堂東九其右像以之憂閑善僧都妙下薩  
 安千之之聖中百八其明三法乃貯大佛山薩行者行  
 身二屬四設奉有十如戒僧藏乃不老精豈實天願  
 學百悉周教釋文庫人此師知聖乞武興及戒人易而  
 道兩備有雖迎庫人藏竝前髮公其陵於吾律坎以咸  
 無為焉寮少如儒都之師得外東世唐不其言於於  
 風遮僧舍異來像老料之及自叡世而諸知威儀白若  
 兩年都凡而二輩西及自叡世而諸知威儀白若上無  
 之脩老百人講教感偏有親徑銅勸僧食到為今無行  
 通葺之慮間善三及其功僧養益古以學俗風處沙東  
 無之慮間善三及其功僧養益古以學俗風處沙東等  
 畿需後以世教本功僧養益古以學俗風處沙東等  
 凍是堂栖則之邦績都父古以學俗風處沙東等  
 之則宇諸一書書浩石自銅防講而宿叡方便勸學  
 憂院朽方矣俾藉大像得像火院不露方便勸學  
 身既壞學其國又以乃居也患正能不常發學至度莫

三聖人の古銅鑿とて、  
 寺法石火和尙あつて、  
 あり同石壁の外、  
 養父母なること、  
 僧都の遺徳を、  
 石塔とて、  
 造るに、  
 石像



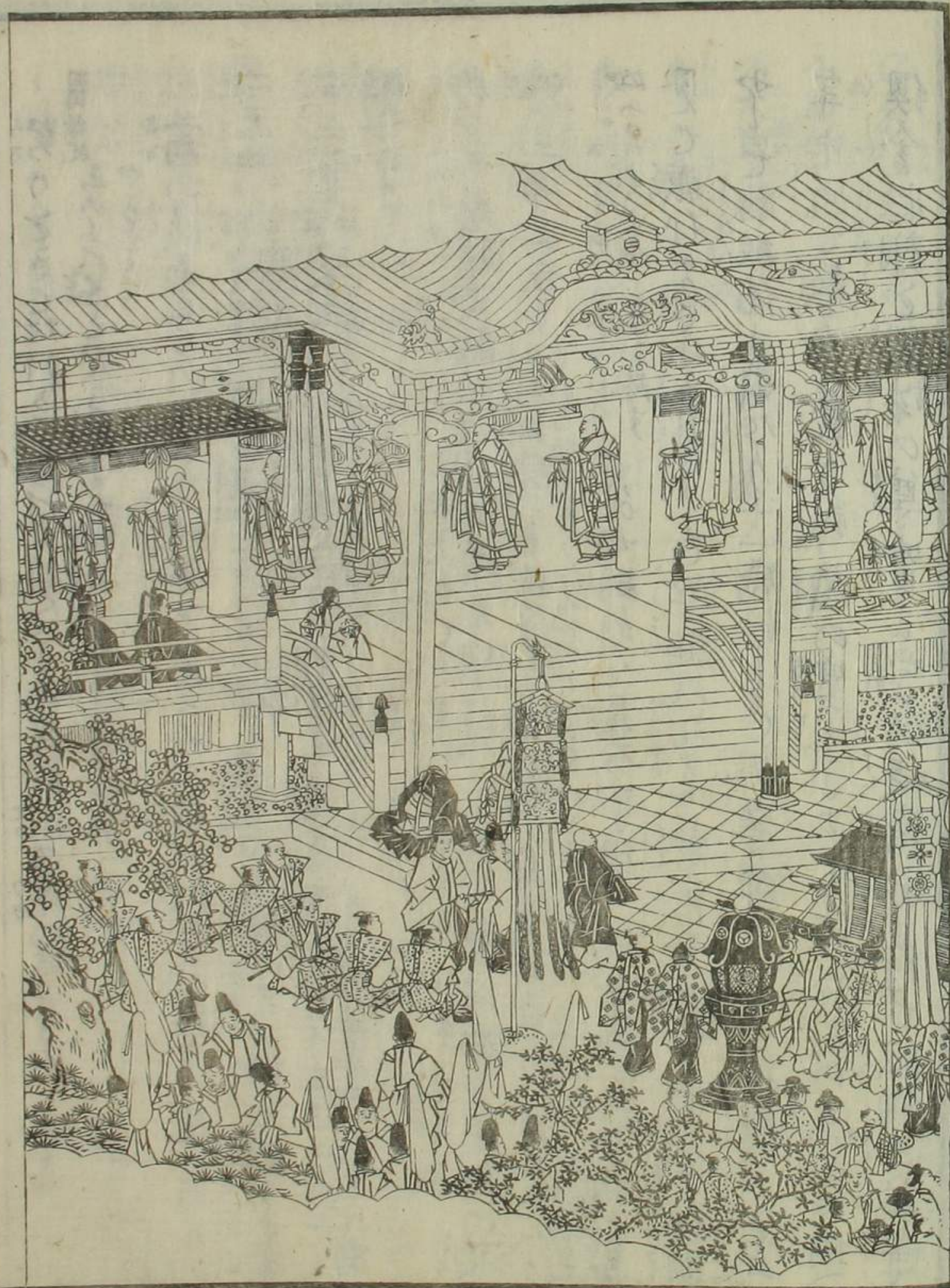
安成則足為世福也於今僧之為一也  
我學脫塵在俗圓項得而臣作三於師之  
蓋飄然未自天不聞佛事門中不可捨一  
矣是成四足若僧其者謂知本矣若捨一  
公則夫所積淨莫不盡其大願國師於三  
載今以行十行藏矣年來又贖為虎關經  
院今春因一奉藏矣年來又贖為虎關經  
然行薄每坐山子院住黃所益願年師  
飯以行策蒲鞋以院住黃所益願年師  
非佛道迎葉波乎致與病交侵而勤頭  
其講今春嚴世詣東都謝僧恩法契已  
之大立院之因葉波乎致與病交侵而勤頭  
元行勸後賢云所罕有僧恩法契已  
元行勸後賢云所罕有僧恩法契已

勸學坊了翁僧都 其俗性冷木氏羽尾勝郡八幡村の産あり寛永七年庚子三月十日  
龍泉禪寺入てぬ儀とありつゆのふかき親族とありあひあれく十八年辛巳城岡四  
それ一切概に心來の行願をて人天の眼目なり統一行と碑に記して一代概に建立せし  
りて保元元年甲申城岡寺に備置小僧一人心志願の成就と行りたるをより

常念佛堂 獲國院あり幸堂より河津院に來と安す最  
宗廟 御當家 御代々の 御靈屋あり當山の院中より  
坊舎凡二十五宇 拾遺衣不具今小洋あり  
丑の園 古き名取申て當山の惣名なり八雲抄抄とて奇枕名寄等も武藏の園小  
梅小當山の惣名と上所と野十或云じり藤堂在の景兒あり一以幸園伊賀  
の上所は地勢相似とて名とすとある是大有縁あり永禄二年小田原小桑  
城分限帳に島津孫三郎とてひ田原寺左馬助等には知行の中は上所の地を  
北首記に所のさうひの岡は優待しとて一徳坐の社五條の  
天神とす

常念佛堂 獲國院あり幸堂より河津院に來と安す最  
宗廟 御當家 御代々の 御靈屋あり當山の院中より  
坊舎凡二十五宇 拾遺衣不具今小洋あり  
丑の園 古き名取申て當山の惣名なり八雲抄抄とて奇枕名寄等も武藏の園小  
梅小當山の惣名と上所と野十或云じり藤堂在の景兒あり一以幸園伊賀  
の上所は地勢相似とて名とすとある是大有縁あり永禄二年小田原小桑  
城分限帳に島津孫三郎とてひ田原寺左馬助等には知行の中は上所の地を  
北首記に所のさうひの岡は優待しとて一徳坐の社五條の  
天神とす





十月二日 天竺山堂  
法華八講



契りてさてたれハ甚れいゆくまよのひの國の處のまよりえ 亮惠  
圓雜記  
まのめれとつる取よて松原のありけふけよ

霜の後あらわれより時雨をい志のひの思れねもひ外 道與准后

二王門 明和九年の田原は焦土となりて 額 東嶽山 大明院宮と辨法親王の筆

宍山堂 座主法親王の師として法華坊より筆興とまよりせり一山の僧徒出侍は筆ハ備

狛竹あり

柳冠山慈眼大師諱ハ天海南光坊と號す奥列會津郡高田郷の人

姓ハ三浦氏あり 且利法住院義澄の子とも或ハ蘆名を傳理ち夫盛高の孫ともいへり

父ハ其美と云ふ事と降す 父母嗣れく月天子は禱り其母奇花と香とを

中して聰敏化は紙なり十一歳にして辨答師と投して祝髪ハ天

年中始て嶽山は登り神藏の實全よさえて台教の深直以傳

俱舍性相と園珠の尊實は學ひ後南都は往て法相三論等

の教法は學ひ成重といふは達て神道の奥儀と究足利の學校

小遊ひて孔老の書と讀道器といふ小肩擗巖と學み後郷は淨り會津

の大寧禪師はあひて教外別傳の旨と發明ハ善慈和尙碧巖

集と聽一百則の話頭と會得ハ其頃甲斐の信玄名教と敬ひ

ある時諸師と請して論義せし天海と講まると衆皆辭理の奇れと

感移れといふ是よりして名を朝野とあらふ後常列江戸侍不動院は

住す時小文祿二年夏大は早々民うれて師として請雨の法を傳

せし其時神女あつて五銚杵と授く師高田浦の深淵に臨むて

法を傳しあふ膏雨忽注て百穀大は登る 彼五銚杵多猶ほて 又慶長

四年武カ加仙はの喜多院に住す同八年下野園長派の宗光寺より

移り同十二年

神君 命して嶽岳の南光坊に住持せし再命して喜多院

に歸り居らむ同十四年山門は登り法華大會を行はく時よ

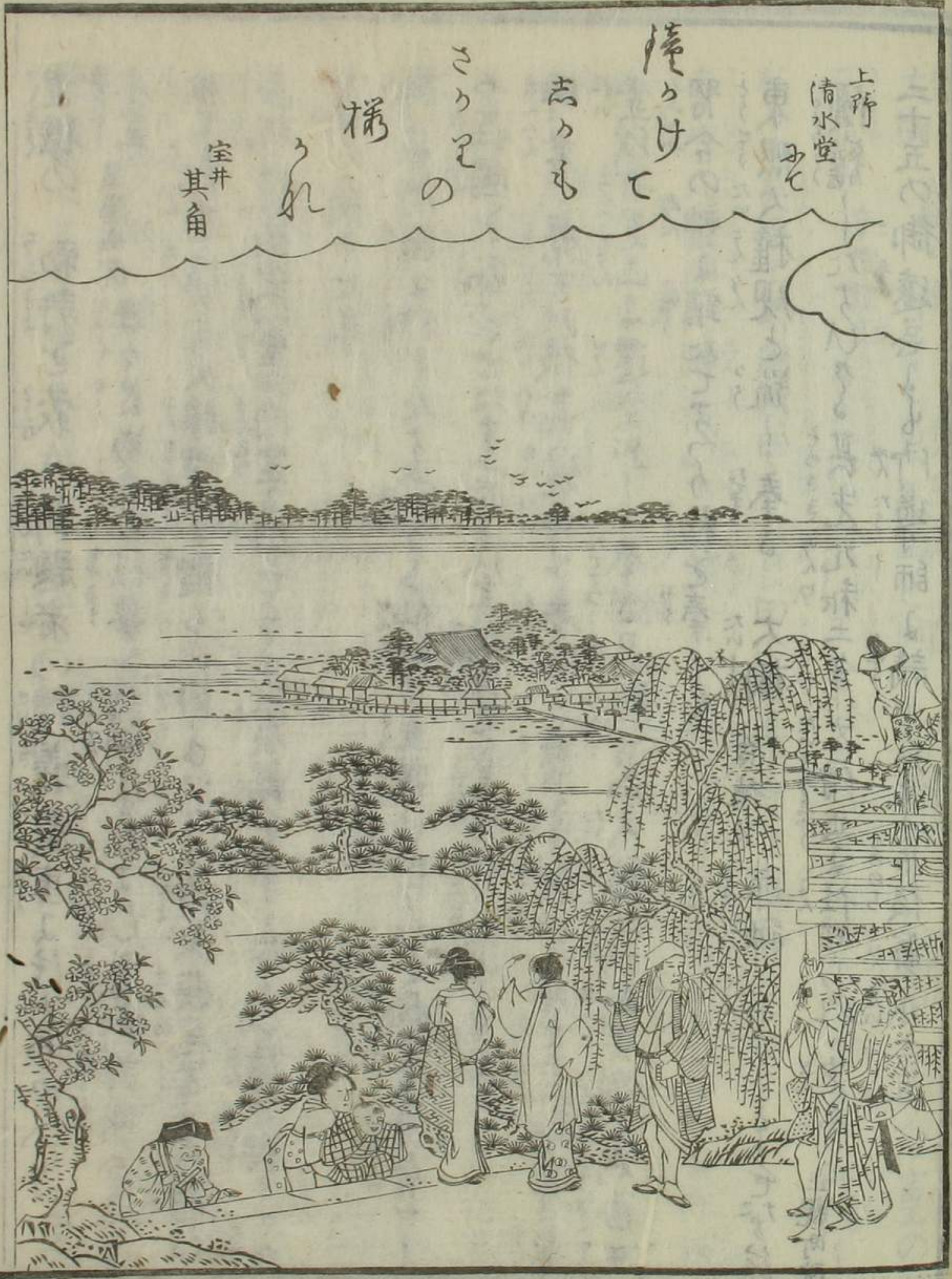


座遷師大両



月毎の海日ハ西大師の  
行敷之院遷座  
かゝる是を將迎  
奉らんとして口府まじ道の  
者人群衆とて道路小  
溢る実此地熱雨  
の中最も  
首あ





上野  
 清水堂  
 みて  
 倦りけ  
 て  
 志りも  
 さりそ  
 の  
 梯  
 うれ  
 宝井  
 其角



清水堂  
 見圖



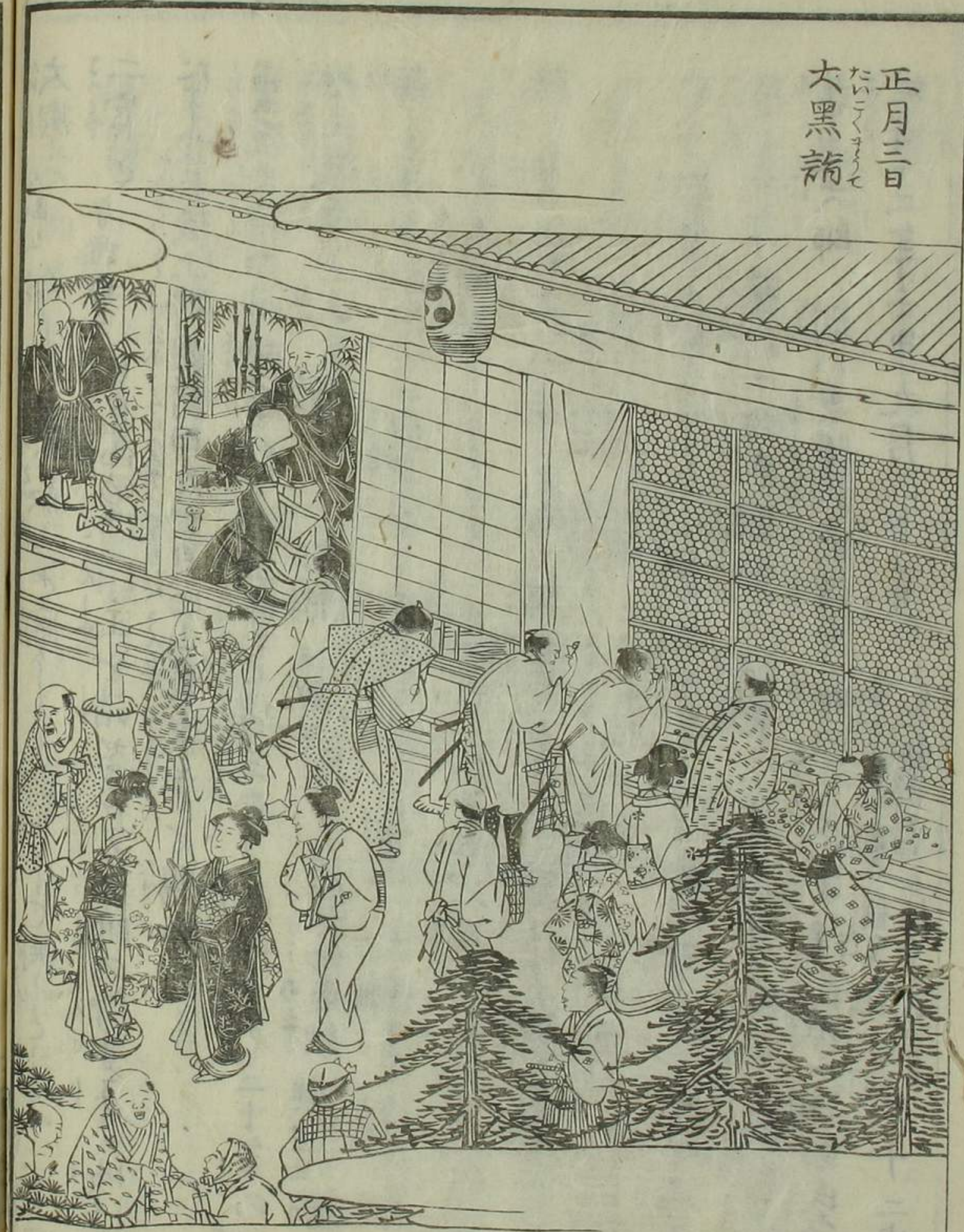
重職の勅許と蒙り新題者の精義嚴重はとわめり  
上皇 後陽成院 度々召ありて法要を詔問したるに美對詳明かふよ  
依て叡感儀々々権僧正は權られ御まう々侍夜燕尾等を賜ひ  
山科の昆沙門堂の門室は附せらるる又震翰を下したるに權を轉して正  
不任す同十七年

神君河越は狩したる折々仙波に立寄せたまひて殿堂を修營せ  
や莊園と寄させたまふ同十八年復命を兼りて日光山に居る  
神君 薨去れ後其遺命を奉りて葬を之終山に營元和三尊  
靈以日光山に遷坐せ奉る是往古の大職冠の例は倣ふ則山王  
習合の神は鎮たてまつり勅を奉りて  
東照大権現と號し奉る 大樹 台徳公 亦神君とせたまふ  
優寵したるに其先元和二年大僧正に任せられ 先帝 正親所院  
二十五の御遠忌にも侍導師は請はたまふ后後寛永二年

大樹 大猷公 命して東叡山を闢くや師として厩山とす又上皇の  
二宮と 守證親王 日光山の侍門主と請せせむ師の侍者子は彼侍  
たふ其後上野國新田庄世良田山長樂寺を賜ひ  
東照大権現の神祠以下の諸堂と造立あり亦同く二十年の秋  
僧正微疾と示す時 大樹 大猷公 とよひ紀の曲相 頼宣公 駕と  
屈し疾を同たつ僧正遂に遺語五則と書は 大樹畫三探函に命し  
たふひて其頂相と写さむ一日唯識論と関ひ忽ち文殊菩薩の來  
現を見る則其時至ると告り端座合掌して遷化す時寛永二十年  
十月二日を 東國高僧傳は寛永十九年十月二日化寂とあり 紫雲天花の瑞  
あり影堂と當山をひひ日光天台の三山に建る當山慈眼堂其あり  
慶安元年慈眼大師と謚號の詔勅を下したるに 以上兩大師緣起とよみ東  
慈惠大師 諱ハ良源江の淺井郡の人父ハ本津氏母ハ物部氏あり  
延喜十二年壬申九月三日よ生まる 父母子あまを篤く觀音に祈りて諱  
十二歳



正月三日  
たいくまて  
大黒詣



毎歳正月三日、都下の  
諸人、東叡山護國院の  
大圓天、さきつ此作影、  
緋神家の真筆にて  
世々靈驗著し、此日供物  
の儀、鏡と湯おひたりて  
衣御の華ふり、俗  
是とみて、作福の  
湯と  
り





もして叡山の理仙と師と同一六年は薙落す理仙久寂の後三條  
右大臣定方公恩訓律師として大師を受戒せしむ亦尊意僧正  
と拜し登壇し早く博學の名を得たり應永三年八月清涼殿に  
南北雄才の僧召召て御八講行はせたまふ時又昂身成佛の相と顯す  
康保三年天台の座主と補せられ山勢を領する事とて二十年又  
天祿二年四月十五日林九綱戒品戒誦を唱ふるに至つて口より  
光明と放光といひり天元四年七月大僧正と轉し輦車に宣旨を下し  
後永觀三年正月三日法院の尊號を唱へて入寂したまふ化壽七十  
四一條院永延元年其徳の高と仰きて謚と賜ふ以上兩大師傳記文亨  
親書等の要とつひ  
慈惠大師影像 民部法眼筆  
慈惠大師の影像は阿闍梨の君の寫りたり眞影と共に比叡山ありしは元龜の  
頃尾品織田氏山門を襲れ一時その折の執事福成坊の阿闍梨とせしむ兩像を  
たてより香子の谷と経て仰木村とて落行けり又敵道とて流徒一人も通  
さしと知れしはこれに供奉する元三大師の尊像ありしは中より通すへしと  
いひけれしは此の大師自ら考吉公いす本藤吉房といふ時ありしは是とて  
いそぎ馬より花あり瘡と免道と定きて通しなごりぬとみとひて兵變

の難を免れたまひますり聖徳の備へて船にて湖東へより後山にのりて時  
後山門再興ありて天正年中彼阿闍梨ののりつた尊影は横川に遷坐する  
ついで今も講堂に安置しなごり是れなり民部法眼ののりつた尊影は  
ハ列女傳の西來といふこととてなごりなり其後度々山門よりいひ  
うけひく尊影は十七年大樹大猷の御令嗣御誕生のゆゑに慈惠大師か  
影像とありし下丹精とてこれなり山門の例にすうせこの尊影は當山院  
慈惠大師遺言してのたより本山の例にすうせこの尊影は當山院  
したてよつるへし又大権の権運と守りたごり國土豊饒と惠んとそま  
一箇月執事したごり執事といふありぬまありしは貴族の命たごり  
あつと運ひ祈願とて成就せすとてこれ一月毎の三日十八日統信僧祥と  
あせり

同除魔景 或時疫鬼來りて慈惠大師と惱んとす時に融三諦と觀して  
彈指したごり疫鬼たちちぬとて生主として疫鬼と通れ  
一わんうち夜叉の形相とありしはうつら瘧と把て新とてうつら瘧と  
と金わんうち夜叉の形相とありしはうつら瘧と把て新とてうつら瘧と  
萬民草屋の扉に至りて今に其影像と贈りたごりうつら瘧といふこと  
東鑑曰寛元五年丁未三月二日乙卯今日可摺寫  
不動並慈惠大師像之由被仰政所之間有其沙汰  
同二萬體被摺寫之今日軍御祈不動尊並慈惠大師  
像一信濃民部大夫道行然奉行之儀導師松殿法  
眼也信濃民部大夫道行然奉行之儀導師松殿法  
慈惠大師の尊像を毎月度摺たごり上ハ玉辭  
慈惠大師の尊像を毎月度摺たごり上ハ玉辭



といのり多事年よりなりと有りぬ今老病とろほとく入る今  
 ぬも擽たてまつるとそほもひつげなふ  
 弘明世小あらん後のますてもいゆるふとぬれとと思ふ 栄雅

慈眼大師真影

狩野探幽筆

慈眼大師の真影の慈恵大師の影像と共に當山院々須菩提二箇月は執事  
 以年この十月の御本坊に遷坐あり  
 大悲藏 慈眼大師の御中の苦よりて信公の隱山に在りて當山よりつたよりと有り  
 佛祖 統紀曰 大士 籤天竺百籤 越圓通百三十籤  
 以支 吉凶 其應如響 相傳是大士化身所述云云  
 柳當山江戸第一の橋花の名勝として一山花はあふくと云ふあり  
 台命よりて和列吉野山の地勢と摸し植させらるるぬみ花は速  
 あり遅ありて山上山下盛とらるるり弥生の花蓋より都鄙の老若貴  
 とれく賤とれく日毎み袖と連てては群遊し花のそめみ尺寸の地を  
 争ふて帷幕以張延席を設く詩歌管絃ハ鶯聲み和し錦衣繡裳ハ  
 花影は映し愛改賞咏日の暮とあらん  
 慈雲山瑞林寺 上野清水門の外武三丁北の方みあり日蓮宗よりて

螢澤

谷中宗林寺の境内  
 あり又竹林寺の  
 池とも螢の光り  
 すて此辺雲の光り  
 依は勝れそり

草地茶と

落る

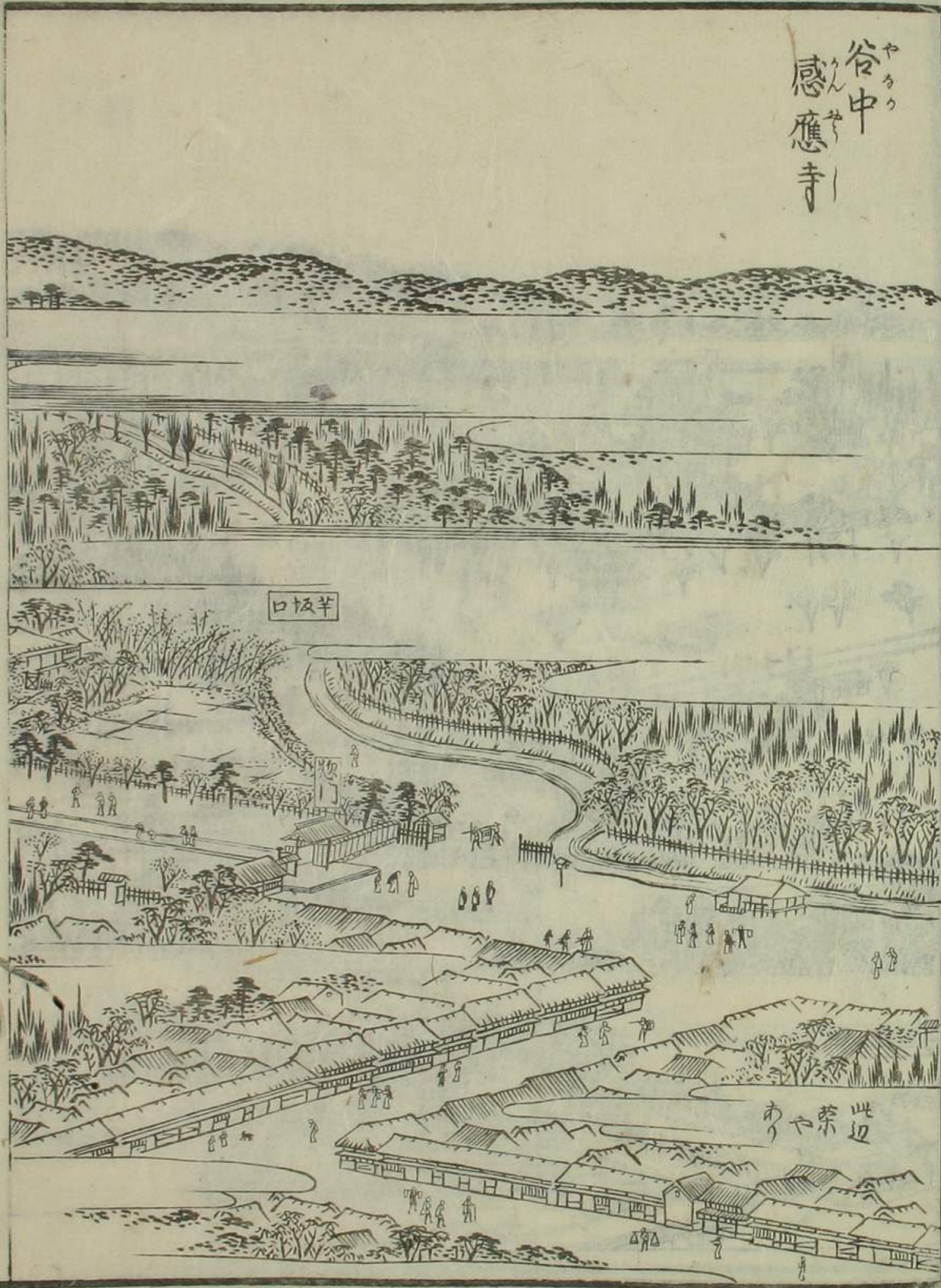
花

芭蕉





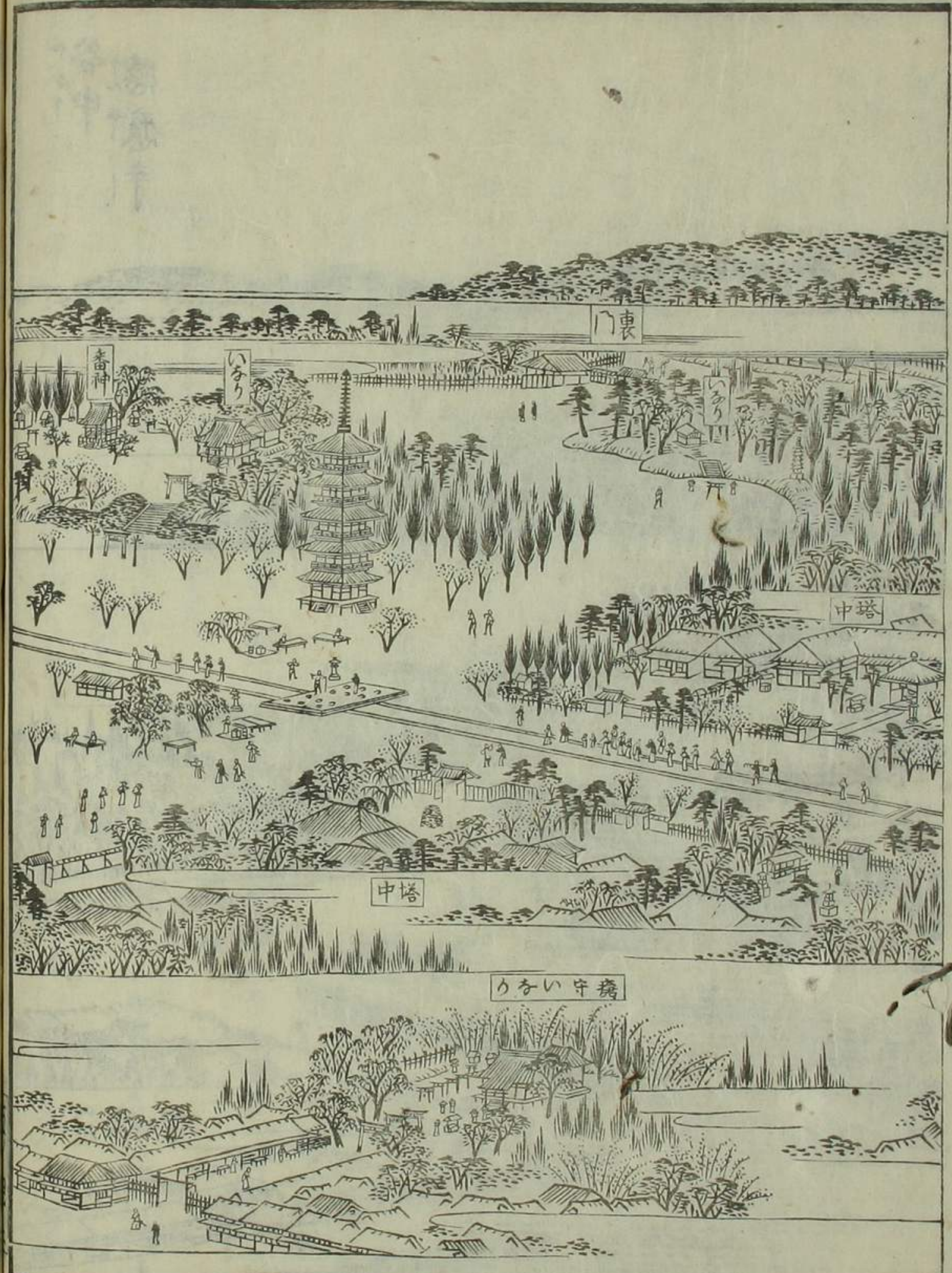
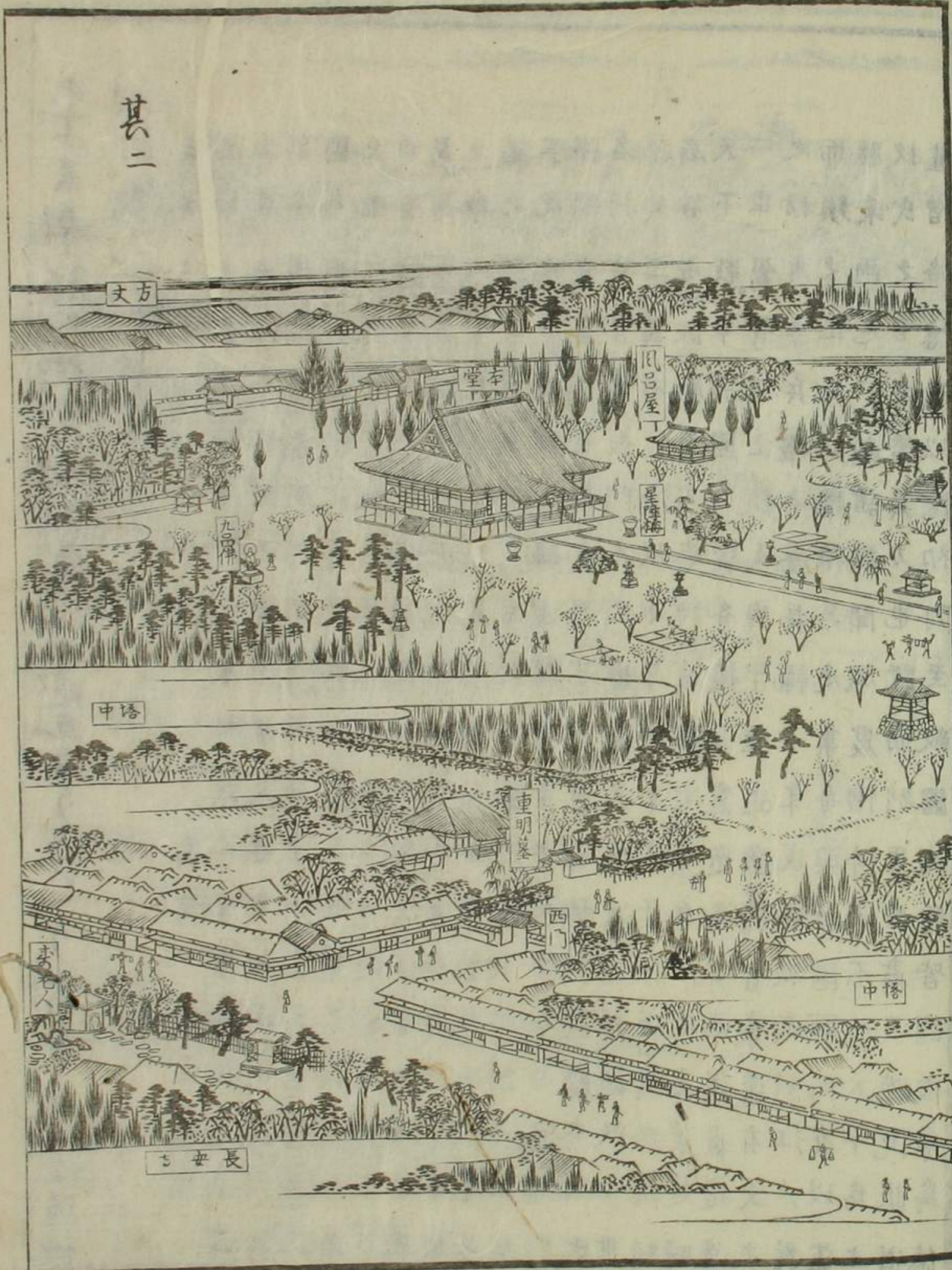
谷中  
感應寺



甲品身延山の觸頭江戸三箇寺の一なり元山八奉山十七世魚雲院日新上人  
 天正十九年れ草創をり奉尊大六の釋迦也來ハ延宝五年此田原より  
 ろひて今侍首と有り存せり 當寺に安並尊日蓮大士の像ハびり因不舎申  
 長耀山感應寺 上野谷中門の外あり天台宗より奉尊ハ傳教大師  
 の作の毘沙門天と安置ハ當寺始日蓮宗より奉尊上人と元山と日長  
 上人中興ありてゆ々浦一宗の寺院たりり元禄年中故ありて台宗に  
 改られ爾より後東叡山ニ属ハ其時大明院宮の清願よりて叡山  
 横川小あり傳教大師の作の毘沙門天の像とて移り奉尊と  
 せらる京師鞍馬山の毘沙門堂ハ比叡の乾也當りて佛法守護の道場を  
 れハ當寺も東叡山の乾也當を以て鞍馬寺とせらるるとり境内  
 極桃の二花ありて春時燦爛をり  
 五層塔 始當寺中興日長上人建立ありり明和九年の火災ニ魚土とあれり仍て  
 寛政の今再建してびり後せり  
 長久山奉行寺 同取小の通あり日蓮宗よりて元山八日玄上人六永



其二





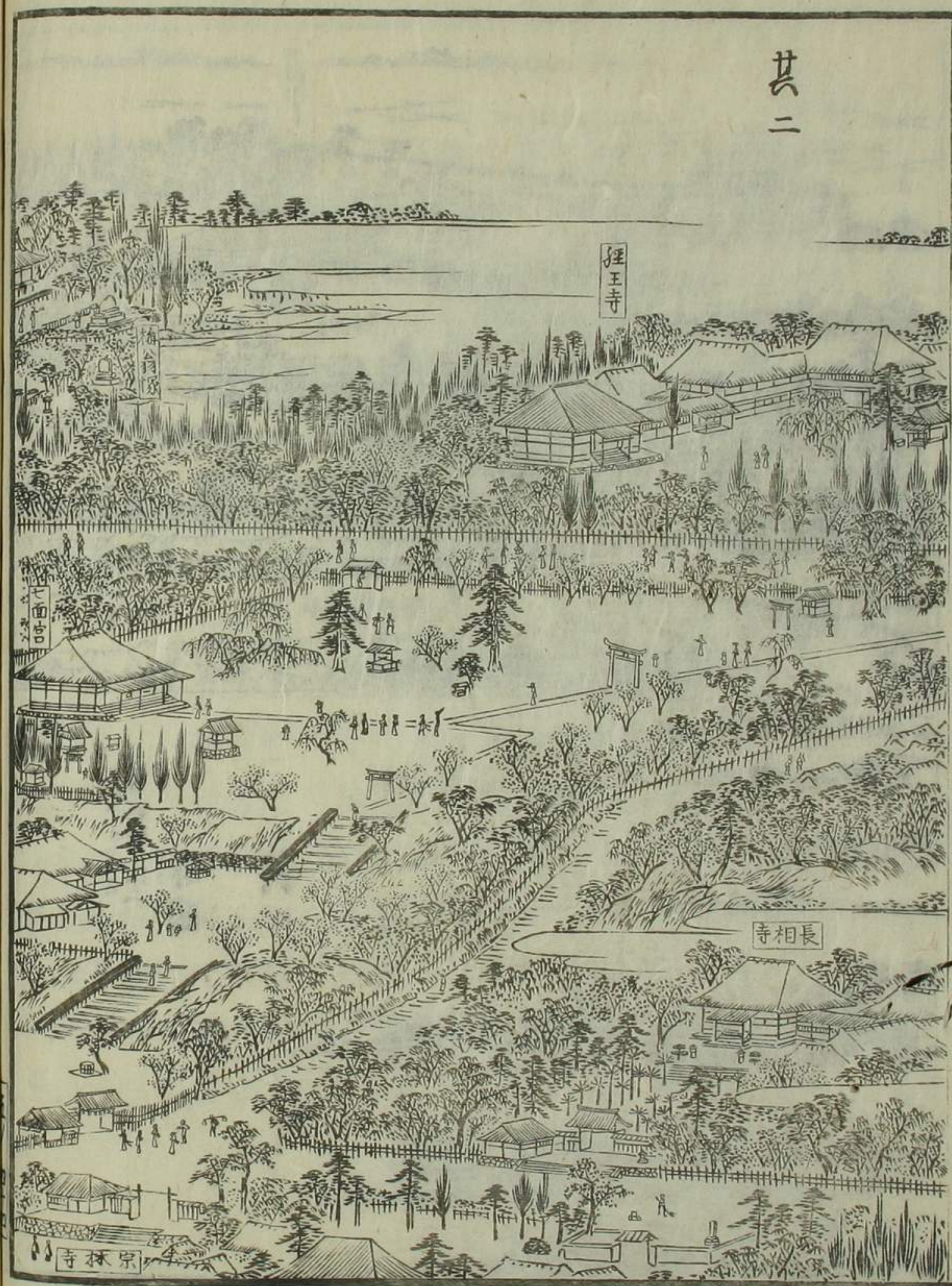


田暮里  
惣圖  
其一

灌叔勝而之二天扇孫名得其攝丘畫百丘則思奚里道  
 增氏衆鎮材世下谷父持斯祀之與爲有唯太太名曰灌  
 脩之兩之專屬戰少道資丘也所山木餘址田田道日暮碑文  
 德有毛正季管爭恢真官蓋寺在皆黍年耳氏保無忘田氏本  
 信者二其兵領諸廓名左不與而用閔于有郭之遺惠也疏在  
 以皆總封機上國有資衙畿群道其壘矣叔自里而寺乎東  
 懷其諸壇之枚瓜大清門得屏灌之名臺相傳里丘寺西里都  
 初力城險要氏裂志以大矣攝之矣地傳里丘寺西里都  
 附也聞其長府各博永夫可遷曾矣地傳里丘寺西里都  
 至既風走祿中據滋亨道不於孫寺彷彿太之乃思其北人郭  
 敵而震集二推其經四灌謂斯今舊徨不田思其北人郭  
 國列帽每年道黨史年其奇里懸在不去既田候山亦田有  
 諸界降與戊灌迭善士號也者河谷忍氏太斥有思北筑  
 將寧者鄰寅贍爲兵子源替錄疾中去既田候山亦田有  
 皆肅不國城智脣汰生光諸室世太丘里也之曰氏道也  
 謂百絕戰武豪齒明道盡灌頼牒中相田其人自址道也  
 彼姓大利列邁道盡灌頼牒中相田其人自址道也  
 專悅半在江有真策於政太也義氏址過有也灌里道猗  
 爲眼爲以尸文道足相十田遷以羣焉其丘故蓋人灌撰  
 德道上寡焉武灌時列世氏則守屏故墟二無山奚丘

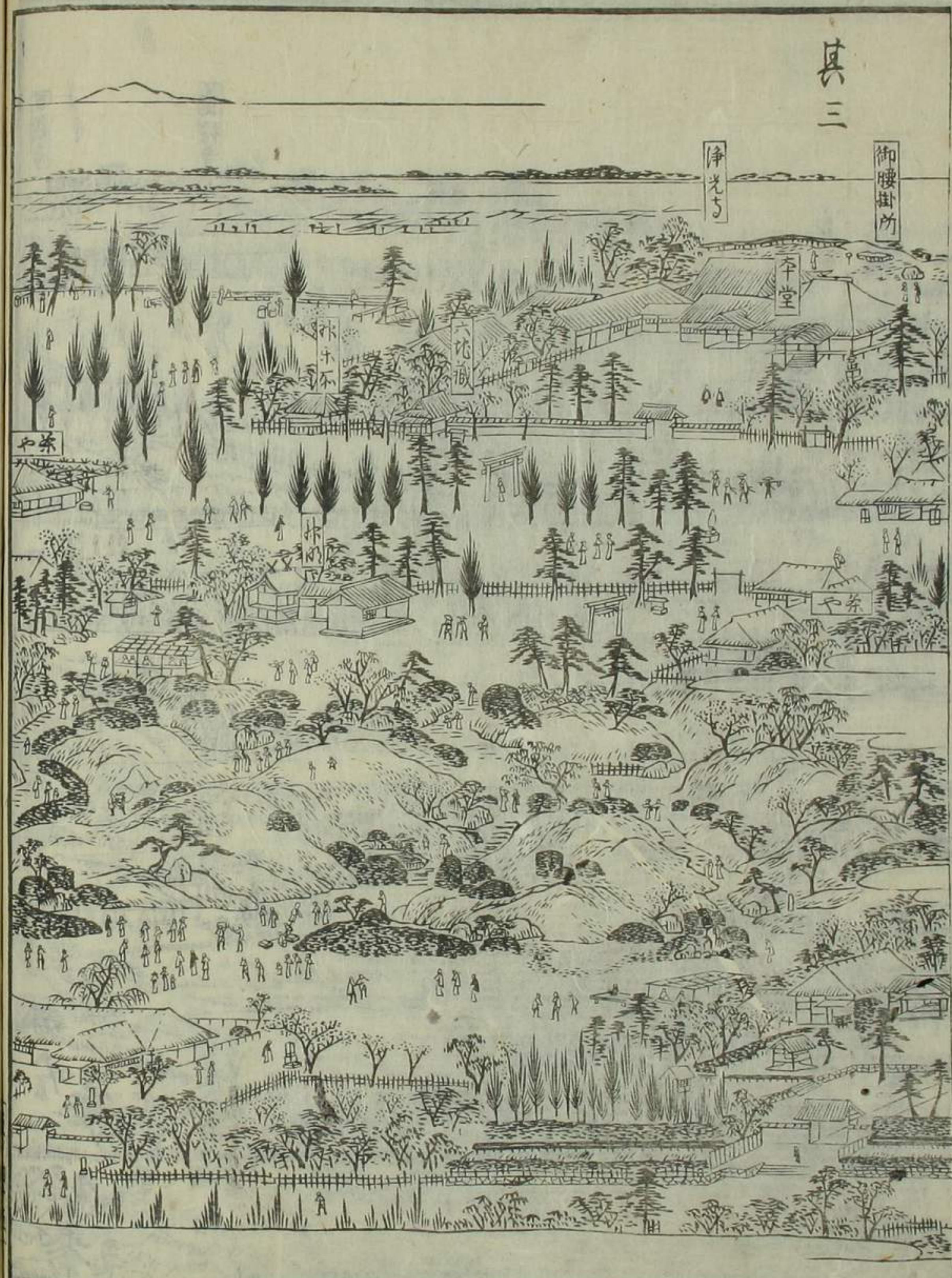
六年及草創以往有八右田道灌の建立ちりといひり當寺庭中道灌  
 年候塚と稱するものあり





其二

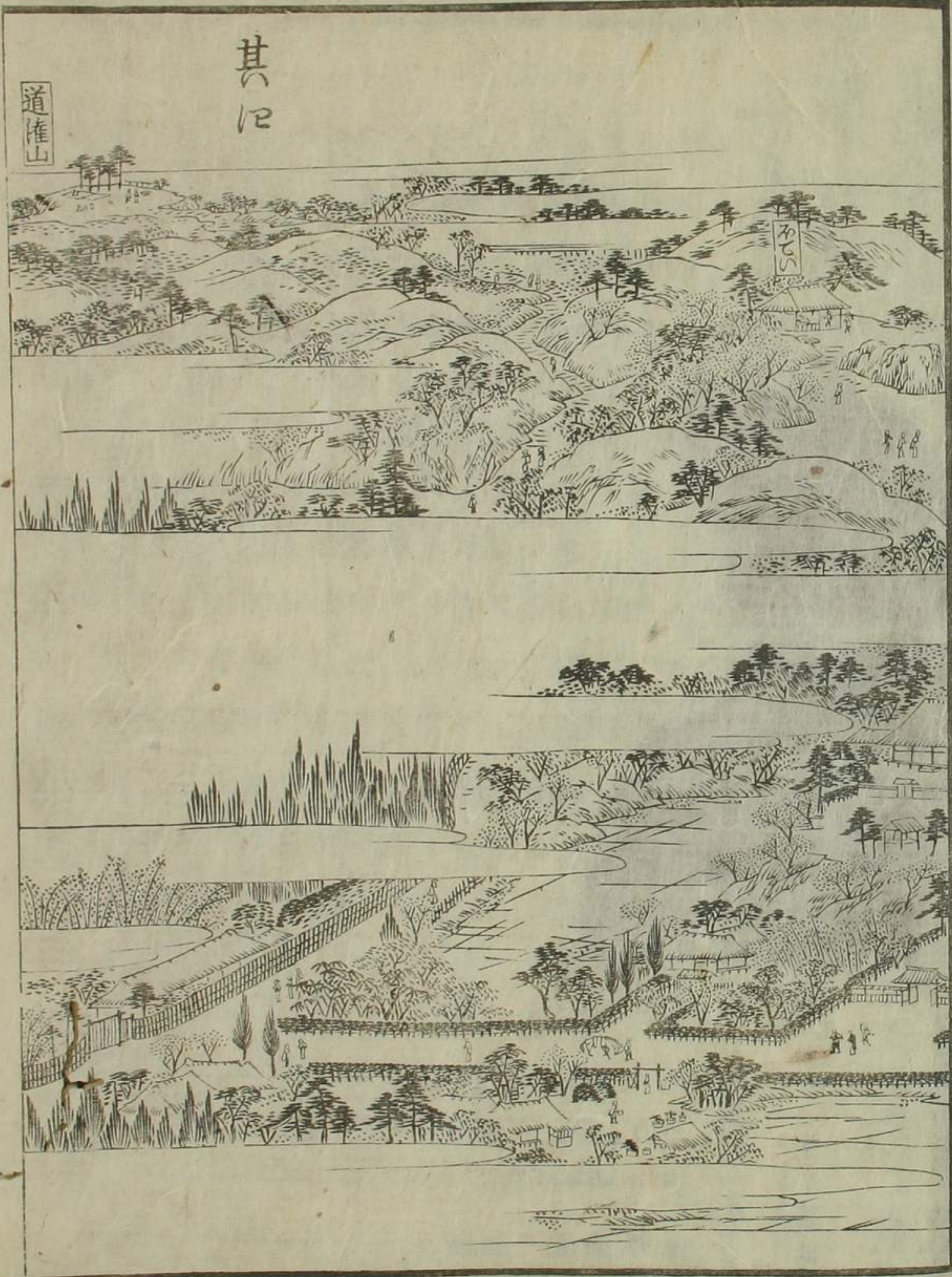






道権山

其  
江



日光山



舟つかさ松

入ら

三ノ

観音

青雲

彼性院



我專為暴是戰而自服也  
采道灌所詠國風御天正  
章也以褒揚之造千今世所傳  
知也四宮成煥圖樹石于丘  
昔灌公之德及武人無忌其  
然何至斯里之羊叔子亦無  
世也吾聞之立碑歲時享祀  
想之所建廟此碑國初時其  
灌公異於萬石寔為顯公孫  
之封食邑五萬石其為盛矣  
以歲時朝東葉昌阜齊肅有  
之必若朝東葉昌阜齊肅有  
白羽若朝東葉昌阜齊肅有  
發爾踊躍用兵乃皆延頸以  
焉爾踊躍用兵乃皆延頸以  
其四竟於是乎君夫慨然念  
令名以竟於是乎君夫慨然念  
焉爾踊躍用兵乃皆延頸以  
三十番神堂 奉堂のありてあり  
感應寺裏門のありてあり

假山を設け口時草本の氣絶以常遊觀  
亭茶店の櫓几不せく貴賤被とはくして  
名め一あるりのあらん

七面大明神社 因不延命院といふ日蓮宗の寺に安置す  
三年庚子正月十六日夢中み靈告を得て後勸請すとあり

補陀山養福寺 觀王院と號す因不北の方あり奉尊の三尊の弥陀佛  
本食義高上人あり 傳の前の田満寺の条やみ

觀音堂 西園坂東秩父百番の奉尊如意輪觀音  
十一面觀音 相如藤倉杖のうらりあり 正觀音 慈覺大師の作ありて秩父札不牙一番

柳此百觀世音の義高上人の建立れり上人初高野山の高臺院に住職  
たうら後彼寺を退去し當此に越さ百番の札取を摸さむまを  
企川是奉土且至りわら死見女等の結縁の為とあり假此也



小庵のありり多成開きて寺と

往古田道権勸請あり 数井宿の地を

寄附せられしとを奉尊おろし野山より迂し奉る霊像ありと云と

百斛又えさるを欲きこれを後補し一斛毎に佛舍利一顆を御首み

寵竟百斛の尊像をくらしむと云二王門の額に補陀山とありり波小路

隆貞御の真蹟あり

諏訪明神社 同取北の方諏訪の臺より信及後傍の祭神よかれ

す其後古田道灌此地を江戸味の出張の若とせしきり彼嘗て郭内の

鎮守とみせしとを社頭今も枚の本立生茂里と上久たり例祭ハ七月廿七日

あり當社別當ハ真言宗より法輪山淨光寺と号し當寺の書院ハ

高崖に架して眼下み千歩の田園を見下せり風色ハ幽雅より

四時の眺をならすと云事あり中も雪のありり勝されし世み稱

して雪見寺とも号しと云

人麻呂祠 聖徳太子御遺徳を尊ぶる所なり 是則別當吉社

地蔵堂 建立あり 元暦二年小宛眼供養ハ此地蔵の二あり

淨居山青雲禪寺 同野小あり妙心寺流の禪宗より増田家代々布金

の道場なり昔堀田相別刺吏紀正亮候羽別山形在味の頃白雲和尚の道

光を慕ひ師小就て法を需む候 台命を奉りて封を小總の佐倉小

移すの頃彼地小庵と結ひ師をりて費座せしむ其後當國入間郡

より藤井山淨居寺といふ類廢の寺院を引て此地小當寺を草創

す 白雲和尚空智七年相の鎌倉建長寺より中化す依て候隣祥願海和尚と結て當寺を建

其後融君正順候香花料として北總の佐倉より百石の地を寄附せらる

境内富士浅間宮秋葉金比羅辨財天護國稻荷等行止も往古を田

道灌の勸請ありと云り

船繫系松 青雲寺の境内涯小臨み鬱蒼とて聳たり往古ハ

二株ありしが一株ハ往安永元年の秋大風小吹折り一本ハ





ほろりふ小

す

さ

ゆ

これ

其角



道灌山徳虫

文月の末を空の中  
 小してとりつさ  
 名みあひ虫塚  
 の口を奇絶とす  
 河人吟客に  
 未だて終夜その  
 能音を孤懸す  
 中も鐘児の言  
 勝てぬ  
 蒹葭の娘の  
 あつてぬ  
 金毘羅の振替  
 くれくれの  
 有明の月と  
 杉並らも  
 一真とや  
 いん



孩もろ此樹蔭より 眺望れ荒川の流る白布（白布）とく筑  
波黒髪（黒髪）の山々ハ盡小似たり 豊島の村落ハ眼小ありて耕（耕）畑  
ラ川賤（賤）の葉まて一金小入利根川の遠帆緑樹（遠帆）のうけに風（風）えかかれ  
古れく白鷺の飛りて此地の風色画中（画）にあらう如し  
或人云く往昔此麓ハ豊島川小狭ハ入江と道灌の岩峰あり一頃ハ平穀其外まて一運送  
の船よりこの松を同堂小せしものまてはまるといふもあちち松とむの義ハあやふ  
の河よりくはちとよハ目的小す採つる小同ハ松とよハ道灌の松と鳴ふとと  
道灌山 一名を城山ともとて南ハ新堀を隈（隈）す小ハ平塚小接す往  
右ハ田道灌江戸城小あり一頃ハ張の岩峰とせし跡ありとも  
又岡道観坊といへる者の茅宅の地ちりとも云傳ふ  
道観坊とて長輝といふ後藤の  
長輝といふ後藤の  
感（感）意寺を長輝山と稱すもあはれ也  
葦常小ニ小来れそ殊小秋の頃ハ松虫鈴虫露小ありて清音  
をありハす依て雅客幽人とも小来り風小詠一月小歌ふて其言  
を愛せり



